

伊能忠敬研究

二〇〇一年 第二六号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵 伊能大図 部分

米国議会図書館で発見された伊能大図二〇六枚のうち、石狩川下流の部分である。明治の初年に陸軍が地図を制作する必要から模写したものと推測される。大部分の図では山景と平地部の着色がないが、北海道周辺など三八枚は着色されている。

本図に描かれた測線は間宮林蔵が担当した部分である。測線は石狩川の右岸、左岸、あるいは川の中央を走っているが、川中を通る測線は、船で間繩を引いたものと考えられる。

間宮林蔵は忠敬の弟子であるが、第一次測量の途中函館付近の一の渡村というところで、測量家・村上島之丞の従者・弟子として忠敬に対面した。

その後間宮は、樺太探検などの実績を積んで探検家として名をなすが、九州第一次測量から帰着した忠敬と江戸で対面する。

何回か逢つているうちに両名は意気投合する。蝦夷地の忠敬未測量部分は間宮が引き受けることになり、忠敬の九州第二次測量出発までの数ヶ月を利用して間宮は黒江町の忠敬宅に住み込んで伊能式測量術の指導を受ける。

九州第二次測量出発の日には間宮も品川まで見送りに出た。この前後に、忠敬は「間宮倫宗に与える序」という一文を書いて、林蔵が忠敬の弟子であることを記して蝦夷國完成に向けた壮舉を激励した。

忠敬は老中指令により諸藩の手厚い援助を受けたが、林蔵は自身で、従者と人足を指揮して作業を遂行したと考へられる。見方によつては忠敬以上の大仕事である。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

目 次

(表紙写真解説)

巻頭エッセイ

伊能忠敬研究会に期待する

星埜 由尚

最近の話題

歩測名人が十九名、新潟名人誕生

福田 弘行

藤岡健夫氏伊能大図を伊能記念館に寄贈

藤岡 健夫

米国議会図書館で伊能大図二〇六枚発見

渡辺 一郎

研究ノート

伊能古文書教室 家牒(一)

小島 一仁

伊能忠敬の房総沿岸測量(四)

渡辺 孝雄

徳山測量と平山郡蔵の袴紛失事件(二)

伊藤 栄子

伊能家文書紹介 動き出した西国測量

安藤由紀子

玉の浦椿・芳名録より

伊能 陽子

伊能史蹟めぐり2

伊能 陽子

屋久島「伊能の碑」

伊能 陽子

地域史料 対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(三)

入江 正利

伊能忠敬の江戸在住日記(六)

佐久間達夫

伊能測量隊阪部組大隅半島基底部測量

四一

史料案内 佐々木綱洋 編集部

四八

連載・新伊能忠敬物語 渡辺 一郎

五〇

ホームページの閲覧状況

五二

忠敬談話室たより

三九

お知らせ

六一

(入会案内・編集後記)

伊能忠敬研究会に期待する

星 楓 由 尚

伊能忠敬は、学校で必ず勉強する歴史上の人物の一人です。いわゆる偉人といわれています。その偉大な伊能忠敬をいろいろな側面から研究するグループが存在することを知ったのは、フランスから里帰りした伊能図を佐原中央公民館で展示するということを聞きつけ大地賢一さん（（社）全国測量設計業協会連合会業務部長・元国土地理院中部地方測量部長）と見に行つたときでした。その時、確か渡辺一郎先生に初めてお目にかかったと思います。先日「伊能忠敬研究」第25号を頂き、渡辺先生がお書きになつた伊能忠敬研究会5年間の歩みを拝見すると、佐原での展示の後に研究会が結成されたとあり、わずか5年で数々の展示や伊能ウォークなどのイベントを実施され、また様々な研究成果を挙げられていることは、会員の方々の大変な努力の賜と敬服する次第です。私の勝手な想像ですが、これほどの成果を挙げられた背景には、研究会結成以前から伊能忠敬に感心を持つ方が多数おられ、伊能図里帰りを機にそれらの方々が一挙に集結されたことがあつたのではないかと思います。それほど伊能忠敬と伊能図は偉大なものであると言えるのではないでしようか。

私が勤務しております国土地理院は、明治2年の民部省地理司戸籍地図掛の発足にその起源があるとしておりますが、さらに遡ればやはり伊能忠敬の測量方であると言えます。その点からも、伊能忠敬と伊能図にいろいろな側面からスポットライトが当たられその実像が明らかになることは、誠に嬉しいことです。会員の皆様の今後のご研究の成果に期待したいと思います。私どももご協力させて頂きたいと思います。

さて、昨今は、日本経済の問題が喧しく言われ続け、そのため社会が余りに経済偏重に陥つていいといつてもよいと思います。経済も大事ですが、経済のみで社会が成り立つてゐるわけではありません。伊能忠敬は、前半生は経済の面でしたが、後半生は私財を投じ、それこそ採算性を省みず地図づくりに励んだ訳です。現在の世相を観るにつけ、伊能忠敬の業績から我々が大いに反省するべきこともありそうです。伊能忠敬研究会は、会員の皆様のボランティアにより成り立つてると伺つております。伊能ウォークも経済的利得から離れた文化的イベントでした。今後「伊能忠敬物語」の映画化、伊能忠敬の銅像建立などの事業が行われると伺つております。これらの事業が成功し、皆様方のご努力により伊能忠敬の業績がますます知られるようになり、地図の文化的側面への理解が深まればこれ以上の幸いはありません。

（ほしの・よしなお 国土地理院参事官）

歩測名人が十九名 新沢名人誕生！

第二回全日本歩測大会

花と新緑にこいのぼりの東京は武藏野市。この時期、恒例になつた東京国際スリーデーマーチには全国から三日間で三万二千人が参加した。一百年前、全国測量に旅だつた伊能忠敬を記念して開催される「日本歩測大会」は第二回を迎えた。盛大に開催された。

雨で大会は一日に短縮

五月三日はあいにく夜半より雨模様。土のグラウンドは水たまりができ、とても歩ける状態ではなく、主催者協議の結果今日の競技は中止になる。明日の競技に備え、歩測場所を草地に移動する。昨日今日と役員の加藤さん、山本さんはコース設定になかなかのご苦心をされた。

伊能ウオーカーが武藏野に集合

午後になり雨があがる。一時を過ぎると会場には今日の「花」コースを歩きおわつた人達が集まる。そこには大内隊長をはじめ本部隊、ステージ隊など懐かしい顔が揃う。あちこちで再会を喜ぶ輪ができる。伊能ウオーカー報告会で名誉隊長の俳優・加藤剛さんは伊能忠敬に学ぶ歩く文化を語る。現在撮影中の映画「伊能忠敬—子午線の夢」は今秋十一月に公開予定。期待しよう。

韓国から参加していた金哲秀さんと久々に再会。今回は鷗さんの案内で奥さん娘さんと武藏野を歩かれた。

快晴のもと歩測名人にチャレンジ

四日は五月晴れになる。今日一日で過去最高の一万四千人が小金井・多摩湖「水」ルートを歩く。歩測大会は日程が一日に短縮されたため、一回の歩測で達人戦と名人戦を兼ねるようになる。5キロコースの到着者から競技開始。大内隊長は受付、大庭さん新沢さんは競技担当をされる。

歩測区間は第一区間68.09m、第二区間70.02m、第三区間48.77mとかなり短縮されている。このため選考基準を厳しくする。どんな結果になるのか。

達人基準は各歩測区間の誤差が2%以下でかつ全体の誤差が1%以内になること。また名人基準は各歩測区間誤差が1%以下で全体誤差は0.5%以下になつていて。小学生名人基準は大人達人をクリアとする。受付を済ませ、歩測のルールを聞いてからコースを元気に歩く。家族で、夫婦で、また友達などたくさんの参加で会場はにぎわつた。午後からはウォーキング協会の指導員講習のメンバーが加わり、その健脚に正確な歩数、歩幅は平成の伊能忠敬さんをめざしていたようである。参加者のひとり、隊長補佐だった荻野さんは来春の伊能ウオーカー番外編・大隅半島をめざしていた。

四時までの競技は参加総数で六一七人を記録。うち小学生は二六人になる。集計は昨年同様国土地理院の方々が担当され、千川小学校の計算センターで行われた。役員では坂本さん、八木さんが詰めた。明五日は早朝の五時に結果が発表される。

続々名人、達人が誕生

こどもの日は好天になる。歩測名人は十九名、歩測達人が八二名誕生する。小学生で、名人が二名、達人が五名出たのはお見事。

新名人たち

名人上位の誤差率は小数点二桁のごく僅差で、すばらしい成績になつた。第一位の梶原さんは実測に直すとたつたの二十センチだけ。またさすがにベテランの受講生は十一人が名人になつた。

伊能ウォーカーでトラック隊長と呼ばれた新沢さんが見事に名人になる。いつもお弁当を昼食場所に運んでから、一行を迎えてくれたお迎えウオーカーと各地での「伊能教室」講師としての実践活動の成果だろう。会員では健闘された伊能洋氏が達人に、斎藤、川上氏は名人に挑戦したが惜しくも再び達人に。

午後の表彰式で審査委員長の渡辺代表の講評『昨年より距離が短くなつたがそのぶん基準が上がつたのに、多数の達人名人が誕生した。みなさんの歩きに脱帽します』

第一回全日本歩測大会表彰式（上段）新沢さん（下段）三上君

[一般の部]			誤差率
梶原 芳江	埼玉・蕨市	0.01%	
木村 延子	東京・武蔵野市	0.02%	
小正 隆子	神奈川・横浜港南区	0.04%	
今井 正	神奈川・相模原市	0.06%	
高木 敏夫	埼玉・さいたま市	0.16%	
新沢 義博	埼玉・さいたま市	0.27%	
他13名			
[小学生の部]			
及川 和輝	埼玉・上尾市	0.51%	
三上 拓也	埼玉・所沢市	0.80%	



※役員として「支援」「協力」いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。今後の歩測大会の運営につきまして「意見」「希望」をお待ちします。後日、達人合格で「達人証」を受け取つていなの方に電話をしたところ、多くの人たちが「えつ私が達人!」と喜びの声が返つてきました。伊能ファンにと願う。

（福田 弘行）

九州地区の伊能大図一巻を

佐原市伊能忠敬記念館に寄贈

(肥後人吉より米良通り日向南方村に至る部)

藤岡 健夫

我が家の中には、昔から長い軸が大切に保存されてきた。父から「これは、伊能忠敬先生が測量された九州地方の地図で、お祖母様が佐原から頂いたものであり、我が家の家宝だ」と教えられた。それは私の祖父藤岡策のところには伊能家から祖母ますが嫁いできていたからである。この地図は、肥後の人吉から日向に通じる街道筋を描いており、現在の免田、多良木、湯前の町々を通っている。佐久間氏の忠敬日記によるところの街道には天包越という大難所や危険な丸木橋などが多く測量に大苦労をしたことが記されている。

家宝とは言え、このような貴重なものを個人として保有していく良いものだろうか。木造の建物に保存していくには、万一の火災から守ることは難しい。大分以前から思っていたことがあるが、今後息子、更に孫に家宝と称して代々保存させて行くことも難しいと思う。

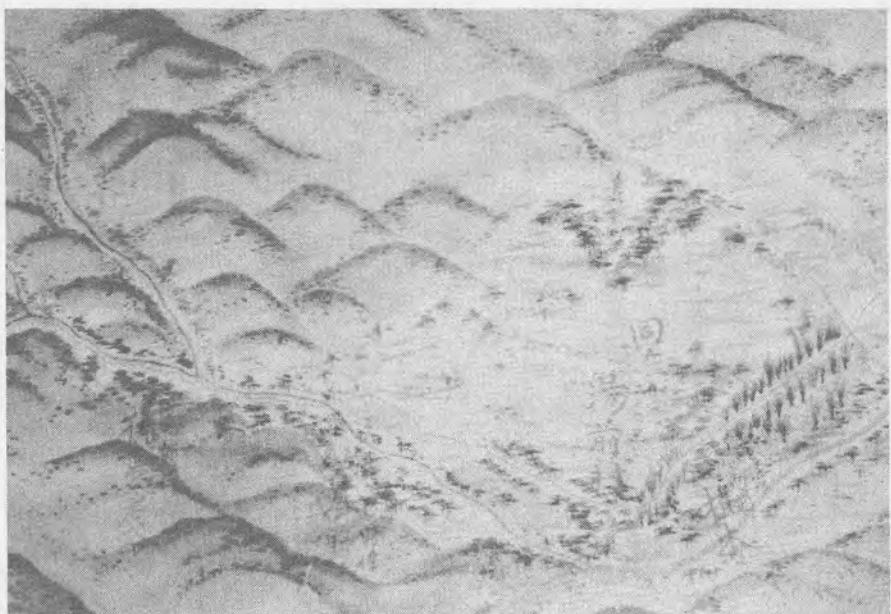
今回家族とも相談の結果、伊能忠敬記念館に寄贈させて頂くことにした。火災など心配のない良好な環境で保存され、広く多くの方々に研究の糧ともなれば、これにこしたことはないと考える。記念館にこの意向をお伝えしたところ、喜んで受け入れて下さるとのご返事を頂いた。

去る五月六日、伊能忠敬記念館・西野館長を始め、記念館、教育委員会関係の方々がご出席のもと、上記の地図を鈴木佐原市長へ寄贈させて頂いた。この九州大図も百十年ぶりで他の忠敬地図と再会し一緒に保管され喜んでいるのではなかろうか。

地図が保存してあつた土蔵もその後傷みが激しくなつて取壊し、父も一五年ほど前に他界して、家宝の地図は私が引き継いだ。地図は軸の長さが2メートル近く、押し入れにも入らず長押に受けを作つてここに保存してきた。この地図は、以前、伊能忠敬研究会例会が学習院大学で開かれたとき展示した。また最近では昨年秋に北九州市立歴史博物館で公開し多くの方々に見ていただいた。



前列中央は藤岡氏、右に鈴木佐原市長、後列は藤岡さんご子息と甥御さん



藤岡家の大図は、九州第2次測量後のもので、伊能家にあった副本

米国議会図書館で伊能大図二〇六枚を発見

渡辺一郎

一、はじめに

江戸末期の測量家・伊能忠敬が制作した日本地図（略称・伊能図、最終本）は、大図二四枚、中図八枚、小図三枚からなっている。中図八枚と小図三枚は国内に写しが伝存することを確認しているが、大図写しは国内各地を合わせて六二枚の現存が知られているのみで、ほとんど滅失したと考えられてきた。

このほど、渡辺の現地探索により、米国の議会図書館地図部が多量の伊能大図写しを所蔵することがわかつたので、日本国際地図学会、伊能忠敬研究会、（財）日本地図センターの三団体で共同調査をおこない、伊能大図写し二〇六枚の所在を確認した。

調査期間 二〇〇一年六月一八日～六月二二日

調査員

渡辺一郎（日本国際地図学会会員・伊能忠敬研究会代表理事）

鈴木純子（会員・日本国際地図学会常任委員・相模女子大学講師）

永井信夫（日本国際地図学会会員・（財）日本地図センター理事）

二、米国議会図書館蔵 伊能大図写しの概要

（1）今回発見された二〇六枚の内訳

今回発見された伊能大図写しを大図一覧図上に表示すると図1のと

おりである。これらの大図写しは、伊能図の最も精細な部分である大図の内容を、ほぼ全国的に示すもので、伊能忠敬の事績と伊能測量の全容解明に大きく寄与するものと考えられる。二〇六枚の一覧表を別表に示した。また、内容を分類すると以下のとおりである。

（2）山岳、田畠、原野に未着色なもの 一六八枚

米国で発見された伊能大図写しは、測量線、地名、海岸、水路、領主名などは忠実に描いているが、一六八枚の図においては、山岳、丘陵、田地、集落など沿道風景の絵画的部分が未完成で、着色がない。しかし、これまで知られなかつた名古屋、福岡、岡山、廣島など人口稠密な地域を含め、ほど全国的に測量線がしつかり描かれており、お城、社寺、塔などは着色して鮮明かつ美麗である。

（3）沿道風景に着色するもの 三八枚

風景部分すべてに着色しているのは、北海道のほど全部三二枚と、三河遠江No.111、紀伊半島のNo.132、No.140、No.139、と大坂のNo.135、および神戸No.137である。概して淡彩であるが、着色は国内の現存図と合致している。

（4）欠図

欠図は、No.12、No.34、No.35、No.107、No.133、No.157、No.164、No.173の八枚で、No.168は重複している。重複図は作業用に記入があり、図上が汚れたので再制作されたものではないかと思われる。

（5）製作者、写図の目的など

着色図には、第七軍管、第一軍管、第三軍管と朱書の肩書きがあり、また、全図の測線部分に各種サイズの鉛筆方眼が残っていることなどから、明治初年の陸軍測量機関が実用のために模写したものと推測される。また、他の収集品のなかには本図を使った編集図も見られる（対

応する本図には編集範囲に赤線が引かれている)。

(6) 米国に流出の経緯

不明である。来歴について、米国議会図書館 (Library of Congress) の地図部長エベール博士は「本図の入庫記録はなく、地図部ができた一八九七年にはすでにあったと推測される (それ以後のものは入庫記録があるので)」と語っている。「戦後の混乱期の入庫でないことは確かで、もし戦後であれば必ず入庫記録が残っている」ともいう。

三、本図発見の効果

- (1) 伊能忠敬の業績である伊能図の全貌がほぼ明らかになった。
- (2) 測量経路など忠敬の足跡を確定することができる。
- (3) 伊能大図と測量日記を対照することにより、忠敬の行動が理解しやすくなる。
- (4) 結果として、全国各地において忠敬に関する身近な事績調査が容易となる。

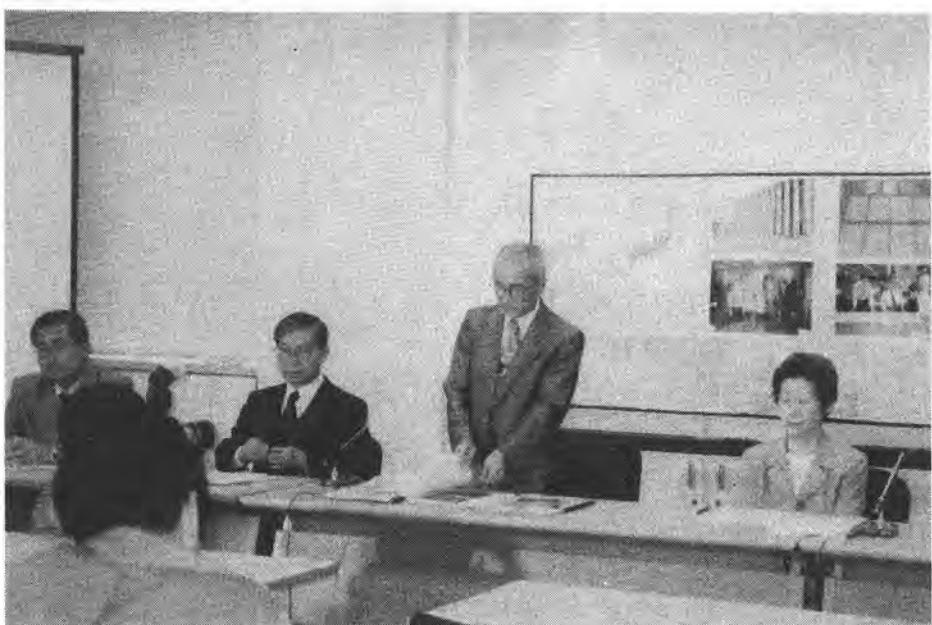
四、今後への期待

今後の展開については、沿道風景に着色した部分はすべて、これまで不明だった地域であり、それだけで展示価値が充分考えられる。しかるべき機関と協力して一般公開できるよう努力したい。

未着色部分は、できれば原寸大に複製して着色し、既着色部分を合わせ、全てを接続して展示できれば、一般の方々に伊能忠敬の業績の素晴らしさを再認識いただけるものと考えている。協力者を求める。

注 本稿は七月初旬に、日本国際地図学会・伊能忠敬研究会・(財)日本地図センターから報道発表した内容によっている。

国土地理院関東地方測量部でおこなわれた記者会見。右から鈴木純子さん、渡辺、日本国際地図学会・大竹会長、国土地理院・堀野測図部長



米国議会図書館蔵 最終本伊能大図写 一覧表

(1/4)

作成:2001-6-29

番号	仮標題	寸法(縦×横)cm	備考
1	シコタン島	102.3×177.7	第七軍管 北海道之図、島の遠景のみ
2	ラウシ山	102.7×167.9	第七軍管 北海道之図
3	国後島	104.4×177.2	第七軍管 北海道之図
4	ルシア、ヲショロコ	104.6×139.4	第七軍管 北海道之図
5	野付半島シベツ	102.3×177.2	第七軍管 北海道之図
6	根室、ニシベツ、落石	101.9×177.5	第七軍管 北海道之図
7	網走、ホロベツ川	102.1×197.9	第七軍管 北海道之図
8	オン子ナイ、ユウベツ	101.5×174.0	第七軍管 北海道之図
9	紋別、サル	109.2×177.6	第七軍管 北海道之図
10	名寄	177.4×101.3	第七軍管 北海道之図
11	猿払	170.3×102.1	第七軍管 北海道之図
12	欠図		
13	天塩	180.5×102.2	第七軍管 北海道之図
14	利尻島、礼文島	180.2×101.5	第七軍管 北海道之図、島のみを絵画風に
15	フレップ、天売島	104.7×142.4	第七軍管 北海道之図
16	苦前	101.9×177.1	第七軍管 北海道之図
17	ハママシケ	175.0×102.0	第七軍管 北海道之図
18	小樽、石狩川口	101.1×177.4	第七軍管 北海道之図
19	ユーハリ山	102.9×175.2	第七軍管 北海道之図、山の遠景のみ
20	積丹半島	100.5×194.5	第七軍管 北海道之図
21	岩内、尻別、黒松内	155.0×104.5	第七軍管 北海道之図
22	厚岸	101.5×170.2	第七軍管 北海道之図
23	白糠	102.2×174.8	第七軍管 北海道之図
24	紋別川、オコツナイ	103.9×154.5	第七軍管 北海道之図
25	エリモ岬	102.6×165.1	第七軍管 北海道之図
26	静内、シヤマニ	102.2×178.2	第七軍管 北海道之図
27	紋別、新冠	102.3×182.0	第七軍管 北海道之図
28	勇払、白老	102.0×175.5	第七軍管 北海道之図
29	室蘭	102.5×169.6	第七軍管 北海道之図
30	長万部、礼文華	103.0×167.6	第七軍管 北海道之図
31	内浦岳	102.8×147.1	第七軍管 北海道之図
32	箱館、木古内	104.0×162.5	第七軍管 北海道之図
33	寿都	103.1×192.2	第七軍管 北海道之図
34	欠図		
35			
36	松前	103.6×160.0	蝦夷
37	大嶋、小島	99.8×156.8	第七軍管、島の遠景のみ
38	三厩、龍飛岬、十三瀉	183.0×101.8	陸奥
39	九艘泊、小湊	182.2×104.5	陸奥・津軽之内
40	野邊地、倉内沼	176.1×110.9	陸奥・津軽之内
41	佐井、大畠	104.2×159.2	陸奥・外南部之内
42	八甲田山	108.6×105.5	陸奥・津軽之内、八甲田山の遠景のみ
43	弘前、秋田郡	135.9×108.7	陸奥、出羽
44	北郡、三戸郡	134.2×110.7	陸奥
45	久慈濱	183.2×103.2	陸奥
46	宮古	177.8×110.0	陸奥
47	大槌、気仙沼	174.1×111.5	陸奥
48	十三瀉、金花山	174.5×104.2	陸奥
49	福岡(一戸)	173.8×108.6	陸奥
50	盛岡	177.1×105.0	陸奥

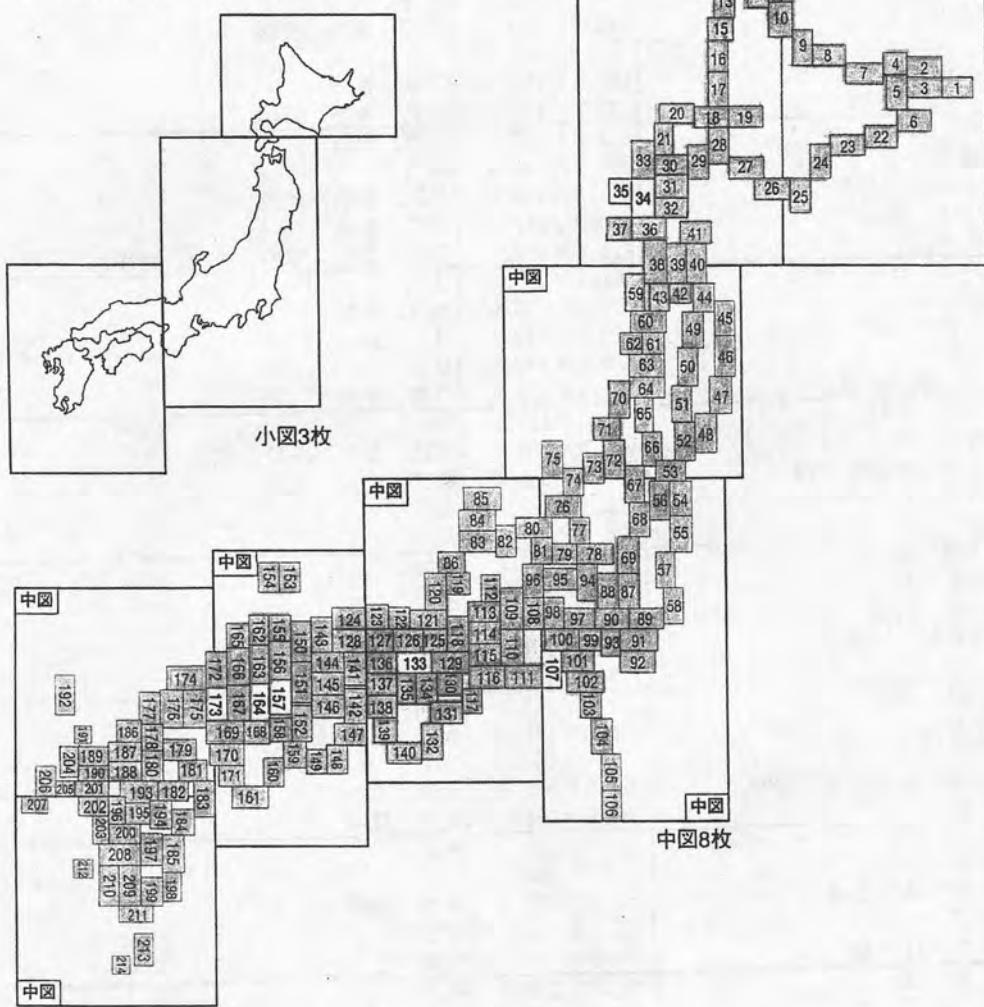
番号	仮標題	寸法(縦×横)cm	備考
51	一関、駒ヶ嶺	181.3×103.5	陸奥
52	松島、仙台	176.4×113.0	陸奥
53	白石、中村	107.8×163.3	陸奥
54	行方郡、標端郡	157.0×104.8	陸奥
55	小名濱、平潟湊	176.9×105.5	陸奥、常陸
56	福島、二本松	177.9×104.9	陸奥
57	那珂湊	178.5×105.0	常陸
58	銚子湊	182.8×103.8	常陸 下總
59	深浦	179.2×103.6	陸奥、出羽
60	大館、能代	104.5×190.5	出羽
61	大平山	103.8×106.0	出羽
62	八郎潟、久保田	104.2×130.7	出羽
63	本庄、厨川	103.1×163.1	出羽
64	横手、皆瀬川、象潟、鳥海山	103.3×181.1	出羽
65	新庄、月山	112.9×167.2	出羽
66	山形、上ノ山、笹谷峠	104.5×148.2	出羽
67	若松、米沢	102.2×175.8	陸奥、出羽
68	那須山、白川	99.0×154.8	下野、陸奥
69	大田原、宇都宮	99.9×173.6	下野
70	酒田	101.7×162.8	出羽
71	(田川郡、岩船郡境)	103.5×147.4	出羽、越後
72	村上	100.4×178.4	越後
73	新潟	101.2×148.8	越後
74	寺泊、出雲崎、與板	99.7×136.6	越後
75	佐渡	97.2×178.1	佐渡
76	長岡	102.9×190.0	越後
77	六日町	107.6×120.4	越後
78	日光山	104.1×177.1	下野
79	三国峠	105.9×136.7	下野、越後
80	糸魚川、高田	105.4×176.4	越後
81	黒姫山、飯山、松代	124.0×103.0	越後、信濃
82	親不知、立山	168.6×103.3	越後、越中
83	富山、加賀 北界、能登 南界	102.2×183.2	越中、加賀、能登
84	能登島	104.8×177.5	能登、越中
85	金剛崎、輪島湊	103.6×180.6	能登
86	金澤、宮腰	105.7×136.9	加賀
87	古河、岩槻、野木	174.9×104.3	武藏、下野
88	忍、川越	176.0×104.5	武藏
89	行徳、五井 東海岸	103.3×162.0	下総、上総
90	江戸、相模野	103.6×178.4	武藏、下総、相模
91	大東岬、富津岬	104.8×177.3	上総
92	小湊、勝山	106.5×186.5	上総、安房
93	神奈川、馬入川、城ヶ島	131.5×110.0	武藏、相模
94	高崎、秩父	173.7×103.6	上野、武藏
95	安中、碓井峠、上田	104.5×175.5	上野、信濃
96	塩尻峠、松本、諏訪湖	166.6×104.4	信濃
97	津久井県、郡内	105.6×150.6	相模、甲斐
98	信濃 東境、(甲府)	146.4×104.3	信濃
99	小田原、大山	108.7×99.8	相模、伊豆、駿河
100	富士山、御殿場	103.5×178.5	駿河
101	沼津、眞鶴岬、天城峠	100.9×155.8	伊豆、相模、駿河
102	大島、利島	104.6×186.9	伊豆
103	新島、神津島	128.7×103.9	伊豆
104	三宅島、御藏島	103.3×176.8	伊豆
105	八丈島	103.7×177.3	伊豆

番号	仮標題	寸法(縦×横)cm	備考
106	青ヶ島	102.5×160.2	伊豆、島の遠景のみ
107	根羽村、馬籠	欠図	
108	野麦峠、福島	103.7×198.0	信濃
109	高遠、飯田	102.6×185.2	信濃、美濃、飛騨
110		104.3×163.6	信濃
111	大井川、浜名湖	115.8×197.5	遠江、三河
112	高山	103.7×145.9	飛騨
113	八幡	104.4×155.0	飛騨、美濃
114	犬山、吉田	105.0×165.3	尾張、美濃
115	刈谷、岡崎、挙母、名護屋	104.2×166.4	三河、尾張
116	吉田、田原、西尾、知多	106.5×179.3	三河、尾張
117	内宮、外宮	143.7×96.8	志摩、伊勢
118	加納、大垣	105.5×151.4	近江、伊勢、尾張、美濃
119	白山	103.0×133.0	加賀
120	大聖寺、福井	177.3×109.3	加賀、越前
121	餘吾湖、小濱、敦賀	105.5×182.0	近江、若狭、越前
122	田邊	126.0×105.8	若狭、丹後
123	宮津	123.0×105.0	丹後、但馬
124	出石、鳥取	104.8×168.8	但馬、因幡
125	琵琶湖	104.0×122.6	近江
126	山城北境、菌部	104.8×147.2	近江、山城、丹波
127	福知山	103.4×129.7	丹後、但馬、丹波
128	生野銀山	105.6×168.0	但馬、因幡、播磨、美作
129	桑名、神戸、亀山、水口	100.0×181.2	伊賀、伊勢、近江
130	津	108.2×131.1	伊賀、伊勢
131	伊勢・紀伊南海岸	103.0×153.5	伊勢、紀伊
132	新宮、那智山	179.1×103.6	第三軍管 伊能大図
133	笠置、郡山、吉野、上野	欠図	
134	大阪、尼ヶ崎	147.0×102.8	山城、大和、伊賀
135		97.9×152.9	第四軍管 伊能大図
136	笙山、三田	102.8×146.4	丹波、攝津、播磨
137	明石、岸和田	112.7×157.3	播磨、淡路、和泉
138	和賀山、須崎	102.4×149.0	和泉、紀伊、淡路
139	紀伊半島、日御崎	129.8×103.1	第四軍管 伊能大図
140	紀伊 串本	155.2×102.5	第四軍管 伊能大図
141	姫路	162.0×107.2	播磨
142	洲崎、徳島	175.3×103.5	淡路、阿波
143	鳥取、智頭	160.2×105.5	美作、因幡、伯耆
144	津山	104.0×155.0	美作、播磨、備前
145	中村、岡山、小豆島	102.3×162.6	播磨、備前、備中、讃岐
146	高松	102.1×162.2	讃岐、阿波
147	阿波東海岸	103.5×157.8	阿波
148	元浦、夜須	102.4×146.3	土佐
149	室戸	103.0×146.6	土佐、阿波
150	勝山	103.7×201.5	備中、美作、伯耆
151	丸亀、松山、児島	39.6×28.0	讃岐、備中、備前
152	金毘羅、多度津	102.3×181.8	讃岐、土佐、伊豫
153	島後	149.4×105.8	隱岐
154	島前	103.7×143.4	隱岐
155	米子、松江	127.7×101.8	伯耆、出雲
156	東城町	180.0×102.5	備中、備後
157	伊豫西条	欠図	
158		113.5×103.6	伊豫
159	高知	142.9×103.1	土佐
160	土佐西部	154.0×104.2	土佐

番号	仮標題	寸法(縦×横)cm	備考
161	宿毛	104.7×180.5	土佐、伊豫
162	完道湖	104.2×149.9	出雲
163	三次 欠図	103.4×174.9	安芸、備後、石見、出雲
164		101.4×124.6	石見、出雲
165		101.4×124.6	石見、出雲
166	新庄、銀山町	104.4×181.4	石見、安芸
167	伊豫諸島、広島	103.4×181.8	伊豫、安芸
168	松山	104.4×132.0	伊豫
169	怨和島、八代島	104.6×177.5	伊豫、周防
170	大洲、佐田岬	103.8×183.8	伊豫
171	宇和島 欠図	103.7×147.2	伊豫
172		168.6×102.5	周防、長門、安藝、石見
173		104.8×188.5	石見、長門
174		182.9×104.5	石見、長門、周防
175		104.8×188.5	石見、長門
176	萩、山口	182.2×103.8	長門、周防
177	長府	207.9×90.4	長門
178	赤間關、小倉	141.5×104.2	長門、豊前、筑前
179	中津、姫島	100.8×212.7	豊前、豊後
180	英彦山	211.4×100.0	豊前、豊後、筑前、筑後、肥後
181	杵築、日出、府内	101.4×228.6	豊後
182	岡	102.0×154.0	豊後、肥後
183	臼杵、佐伯	229.6×102.5	豊後、日向
184	延岡	130.4×102.5	日向
185	佐土原、高鍋	231.2×103.0	日向、肥後
186	宗像、八幡	99.5×119.0	筑前
187	福岡、秋月	103.0×205.9	筑前、豊前、肥前、筑後
188	佐嘉、久留米、柳河	101.5×206.6	肥前、筑後、筑前
189	唐津	110.1×226.7	筑前、肥前
190	岡村	94.5×227.6	肥前
191	壱岐全島	98.0×76.0	壱岐
192	対馬全島	208.4×102.7	対馬
193	熊本、阿蘇	184.8×104.4	肥後、筑後
194	岩戸村、神門村	138.4×104.0	日向、肥後
195	八代	123.2×102.8	肥後
196	島原、天草	142.0×77.2	肥前、肥後
197	霧島山	104.5×178.5	大隅、日向、肥後
198	飫肥	76.1×130.5	日向
199	日向・大隅海岸、牛崎	104.6×170.8	大隅、日向
200	人吉	104.5×151.2	肥後、薩摩
201	大村	76.7×179.4	肥前
202	長崎	103.7×148.1	肥前
203	天草下島、長崎	147.0×99.2	肥後、薩摩
204	平戸	161.3×85.4	肥前
205	平島、江ノ島	60.3×96.1	肥前 五島之内
206	五島北島	97.9×146.9	肥前
207	福江島	88.4×135.0	肥前 五島本島
208	薩摩・肥後境	106.0×196.3	薩摩、肥後、大隅、日向
209	鹿児島、桜島	102.4×183.9	薩摩、大隅
210	串木野、坊ノ津	101.5×186.6	薩摩
211	佐多岬	96.6×168.0	薩摩、大隅
212	甑島	101.6×80.4	薩摩
213	種子島	161.6×77.0	大隅
214	屋久島	99.0×127.9	大隅

図1 米国で発見された伊能大図

最終版伊能大図・中図・小図接合表



伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『家牒』(一)

小島一仁

この稿では、記述の都合上、人名の敬称は、過去現在を問わず、すべて省略させていただいた。

伊能家の先祖書

『家牒』は、伊能三郎右衛門家の初代景久から一五代目康之助まで、代々の事績を中心として記した先祖書で、墨付紙約八〇枚ほどの記録である。

歴代当主の名は、次のように記されている。

中興元祖伊能壹岐守景久・二代目壹岐景常(以下伊能の姓は省略)

三代目勘解由景満・四代目三郎右衛門景善・五代目三郎右衛門景知・

六代目三郎右衛門景利・七代目三郎右衛門昌雄・八代目三郎右衛門景

慶・九代目三郎右衛門長由・十代目三郎右衛門忠敬・十一代目三郎右

衛門景敬・十二代目三郎右衛門忠誨・十三代目三郎右衛門景文・十四

代目三郎右衛門景徳・十五代目康之助。

これによつて、佐原伊能本家の主人が、代々三郎右衛門という通称を用いるようになつたのは、四代目景善のときからであつたことがわかる。

ところで、右のうち、最初から七代目昌雄までのことと記した筆跡

と、以後のことを記した筆跡は明らかに異なる。私が、十五代目康之助の室・多嘉(一九八三年死去)から聞いたところによると、七代目昌雄までのことは、江戸時代に編集・記録されたのであるが、八代目景慶以後のことは、多嘉が姑のこうの指示により、伊能家に伝えられている『旌門金鏡類録』等の記録を参考にして記したものであるという。

では、七代目昌雄までのことは、いつごろ、誰によつて記されたのであろうか。そのことは、はつきりしない。しかし、八代目景慶と九代目長由は、ともに、七代目昌雄より前に死去しているので、この記録が十代目忠敬以後につくられたことはまちがいなかろう。そして、忠敬以後の伊能家の状態から考へると、この記録は、忠敬によつてつくられたのではないかと思いたくなる。しかし、その確認はなく、また筆跡も忠敬のものではない。

さて、『家牒』は、最初に、佐原に来る以前の伊能家の先祖についても、比較的簡単に記しているので、まず、そのことから紹介しよう。『家牒』は、次のような文章で書きはじめられている。

伊能先祖書

一先祖生國大和國守市郡西田に

平城天皇御宇大和二丁未年脅十日崇勅命下條國高麗守
大國守ト向シ御宇大和國守世とノ國賀池貢ス右府源賴朝公
天下一統府守治平二年立業常潤に男ノ御胤守高麗守
とノ家ノ守高麗守後を源頼也と歴足利公赤蘿
亂世府伊能村守源頼を構立す所人延伊能を後法鷹代也

原村行修

(訳文)

手前先祖書

一先祖生国大和高市郡西田住

平城天皇御宇大同二丁未年九月十日蒙勅命下總国香取郡

大須賀江下向シ伊能村正住店春日大明神奉勅請世々大須賀地を領ス

右大將源頼

公天下統一之時文治二午年千葉介常胤四男胤信江大須賀地

を被宛行候付其以後は纏之所領世を歴足利氏之末諸国

乱世之時伊能村正皆城を構籠在候所先祖伊能壹岐道野代佐

原村江引移ル

続いて、かつてこの家にあつたという「伊能系図」の写しとして先祖代々二〇余名の名乗が記されており、次に最初の文章を補足するような記述がある。これは、わかりやすいように、読み下しにして記することにする。

伊能氏先祖の事、古来より伝え候は、本国は大和国宇田郡にて候處、上古下總國へ千葉殿の横目として禁裏より仰せ付けられ、当國下向大須賀伊能村に住居致し候由、藤原姓なる故只今之伊能明神春日大明神を勧請し奉り候由、即ち伊能之先祖の勅請の御社の由、彼所に年久敷居住致し後に千葉殿の一族旗下の様になり候て其後時代過ぎて佐原村へ引越、民間になり候由、依つて在名伊能を名字に致し候よし古き人咄に申伝え候

「大須賀伊能村」というのは、現在の香取郡大栄町伊能のことであり、この地名が、伊能という姓のもとになつたというのである。

逆修というのは、死ぬ前に菩提寺から戒名(法名)を請けて、あらかじめ自分の冥福を祈ることである。図の中に見える「道野・妙高」というのが、景久夫妻の請けた戒名である。「逆修善根也」とあるが、これは、「逆修菩提」という刻字の読みちがいであろう。

景久佐原村へ移る

佐原伊能家初代の景久については、ごくわずかのことしかわかつてないが、『家牒』には、具体的な資料として、逆修菩提板碑の模写図が載っている。この板碑は、観福寺の伊能家墓所内に現存する。



この板碑は、享保元年(一七一六)、六代目景利のときに発見されたのであるが、景利は、景久の没年が不明であつたため、この板碑にある「天正十六戊子八月十五日」を景久の命日に立てたという。しかし、この「天正十六年」(一五八八)といふのは逆修をうけた年であつて、景久は、この時おそらく隠居していたではあろうが、まだ健在だったのである。後に、この板碑にある道野・妙高という戒名から、観福寺の過去帳によつて、景利は慶長六年(一六〇一)、妻はその翌年に没していることがわかつたのである。

さて、この景久の代に、伊能家は佐原村に引き移つたというのだが、『家牒』は、その時期を「今按スルニ永禄之末ニ当ル」(一五六〇年代後半)としている。当時、現在の佐原市及び香取郡の神崎町・栗源町等をふくむ地域は矢作領といわれ、大崎城主国分大膳の領地であつた。矢作領といわれたのは、国分氏の居城がもと矢作にあつたからである(大崎も矢作も現在佐原市内)。景久は、国分氏の幕下として、はじめ佐原一村を知行したが、その後「民間ニ成」、嫡男の勘解由(二代目景常)が国分氏矢作領内の「公事収納」を司つたといふ。

景久は、天正年中に、景常に家督を譲つて隠居し、二男七郎右衛門をつれて、小野川をへだてた本家の向う側の地に移つた。現在の伊能忠敬記念館が建つてゐるところである。景久は隠居後、天正八年(一五八〇)に金田郷左衛門・小林与五右衛門と申し合わせ、領主国分氏に願つて、村の繁昌のために新しく市を立てた。このことを『家牒』は、「佐原村新宿開起ス」と記してゐる。この市は、六祭市として、江戸時代まで続いた。

二代目景常は、父の景久と共に佐原村へ移つたが、若年にもかかわらず、しばしば、小見川にいた栗飯原左近太夫と戦つて武功をたてたといふ。その後、「民間」に下つて、矢作領の「公事収納」を司つた。大崎の城にいた国分大膳は、天正一〇年(一五八二)に、岩ヶ崎の地に城を築替えて引き移つたが、同一八年(一五九〇)、豊臣秀吉の「小田原攻め」によつて岩ヶ崎の城も落城焼失し、国分大膳は常陸鹿島に落ちのびた。同年、徳川家康が関東に入国し、矢作領は、代官吉田佐太郎の支配下に入つたが、そのとき、景常は、矢作領の割本役を命じられた。割本役といふのは、おそらく以前の「公事収納」をつかさどる役と同様、大庄屋のようなものであつたのだろう。間もなく、矢作領は鳥居彦右衛門の領地となつたが、景常はひきつづき割本役をつとめた。

慶長四年(一五九九)六月、鳥居彦右衛門によつて、矢作領の検地が行われた。『家牒』には、「矢作領村附」として、そのときの各村の名称と、定められた石高が記されている。それによると、矢作領の村数は八四ヶ村。その総石高は、三万九七七四石。最大の石高をもつ村は佐原村で、一八一七石五斗。最小の村は幸谷村で六六石六斗九升。八四ヶ村の平均石高は、四七三石余となる。佐原村は、とびぬけた大村だったのである。

また、「勘解由持反別覚」も記されている。勘解由といふのは景常の初名である。これによると、景常は、一〇八筆の土地を保有しておらず、その石高合計は五八石八斗武升余となつてゐる。だが、そのほかに、初代景久が隠居したときに分地した「伊能壹岐隠居地」が二一石五斗四升余あつたから、伊能家の保有してゐた土地の石高は、総計八〇石を超えていたのである。

国伏見城で石田三成の軍に攻められて討死した。その功によつて、息子の鳥居右京太夫は奥州岩城一〇万石の所領に所替えとなつた。それで、矢作領はまた徳川家の直轄領となり代官吉田佐太郎の支配下に入つたが、慶長一〇年(一六〇五)に吉田が死去したため、代官は中根七藏にかわつた。このときから、景常は、「権現様・将軍様」、すなわち、大御所徳川家康と二代将軍秀忠の「御菜鮭御用」を仰せつけられた。

江戸時代、利根川下流には、秋から冬にかけて、各地に網代場がつくれられて、鮭がたくさんとれた。それを、将軍家の食用として献上せよとの命をうけたのである。

『家牒』には、「台徳院殿様執事」(将軍秀忠側近)の青山播磨守が景常に与えた鮭請取の手紙が八通書写されているので、その中の最初の一通を次に紹介しよう。

（訳文）
尚々さけ取
候て能々念を入
鮭壹尺慥ニ請
候て御越候べく候
取申候、然者先度は
七日之日の時分
將軍様此方へ御帰
其許へ参候処ニ
御馳走とも過分
のさけを夜通
被成候間もち
のさけと空色

手紙は、慣れぬとなかなか読みにくい。この手紙では、比較的大きな字で「鮭壹尺……」とあるのが書き出しで、その前に二行と、そのあと行間に記された細かい字は、追伸として記されたものである。文字・文章の読み方では、「候べく候」というのが出てくるので、これを覚えておくのがよいであろう。

矢作領の村々は、慶長一三年(一六〇八)から、旗本・諸藩の知行所になり、佐原村は、小野川東岸の本宿側が天方主馬高三五〇石、青山大内藏高一一七石五斗、興津内記五百石、小野川西岸の新宿側が興津内記高五百石、近藤勘右衛高三五〇石の知行所に分けられた。そのため、景常は、矢作領割本役と鮭御用をやめることになつた。しかし今度は、天方主馬知行所の名主をつとめこととなり、また、鮭御用をつとめた褒美として、幕府から、佐原村の塩役と網代場の権利を認

二候、昨日無何事
可有候、其元取
次第追々御越
候べく候、恐々謹言
以上
候間御心安
九月五日 播磨御用
勘解由殿 播磨
さわらニ面
返事

さわらニ面
勘解由殿 播磨
勘解由殿

められた。塩役というのは、鮭御用をつとめたとき、鮭を塩引きにするために、佐原村で塩を売る者から、九十九里浜塩五斗俵一俵につき役塩一升づつを取り立てたのであるが、その権利をそのまま認められたのである。そのかわり、毎年、塩役として永二五〇文、網代役として永八四文を冥加金として上納することになった。

元和五年（一六一九）、景常は通称を勘解由から壹岐に改め、名主役を嫡男源六（勘解由景満）に譲つて隠居し、寛永二一年（一六三四）八月、新宿側の隠居屋敷で死去した。七十六歳であった。

伊能忠敬記念碑 二題

○伊能忠敬銅像建立募金

順調に御送金いただきまして、当会目標百万円の八四%をクリアいたしました。寄付予定でまだ送金されていない方、至急お願ひします。全体の募金も順調で、二千万円目標のところ、約千六百万円に達しました。制作の作業も伊能洋さんの監修で、着々と進んでおりまして、起工は九月四日、除幕式は一〇月二〇日（土）と決定しました。

当団は日本ウォーキング協会が、皇居前を出て亀島町の地図御用所跡、隠宅跡を通つて銅像前に到着し、除幕式に参加する「伊能忠敬銅像建立記念ウォーキング」を計画しており、千数百名の参加を予定しています。除幕式は一時の予定です。会員各位で時間の都合のつく方は一〇時半頃お集まりいただけと有り難いと存じます。

○北九州に伊能忠敬測量記念碑が立ちます

忠敬が九州測量の起点にした小倉の常盤橋際に、伊能忠敬記念碑建設実行委員会（会長、会員・村井純孝、事務局長、会員・熊谷要平、委員に研究会の石川支部長）の手で記念碑が立ちます。北九州市の「0番測量基準点」を併設した生きているモニュメントです。

除幕式は九月二六日。屋久島とか小倉とか元気な九州勢に、結果的ですが、東京の富岡八幡宮の忠敬銅像建立の先陣を務めていた大いにあります。快挙です。（問い合わせは 石川九州支部長（））



「伊能忠敬銅像」のミニチュア試作です。いま測量に第一歩を踏み出したところをイメージしています。

伊能忠敬の房総沿岸測量 (四)

渡辺 孝雄

第二四日 岩和田から小浜まで (御宿町～大原町)

七月一三日 この日は晴れていたが海面の見通しが悪く、六つ半頃 (午前七時頃) に岩和田村を出発している。

岩船村 (三七五軒、大原町) 大井谷村 (三〇六軒) 寄瀬村 (一五四軒) を経て、八つ後 (午後二時過) に小浜村 (四四一軒) に着いた。日記にはこの日に泊まつた宿についての記述はない。この日の岩和田村から小浜村までの測量距離は、二里二五町一九間 (一〇五五九・五八ば) であった。夜は晴れており、天体観測を行つてゐる。観測では、三五度一四分三〇秒であった。小浜村の宿から、佐原村の息子三郎右衛門に宛てた村継ぎの手紙を出している。その添書には「上総国夷隅郡小浜村測量御用先より、下総国香取郡佐原村迄急用があるので、早々に村継ぎして送つて下さい」とあり、その順路として、「小浜村 長者町 市之宮町 東金町 成東町 横芝町 田古村 桜田村 佐原村」をあげてゐる。佐原から銚子湊へ荷物を送つて貰いたいとの内容だつたらしい。

第二五日 小浜から中里まで (大原町～白子町)

七月一四日 この日は中晴れの天氣で、六つ半後 (午前七時過) 小浜村 (大原町) を出発している。日在村 (二二七軒) 江場土村 (一九九軒、岬町) 内野郷三ヶ村 (新田村一八五軒・若山村一三四軒・深堀



夷隅郡	長柄郡
阿部伊織守知行所	
江場土村	内野郷
伊能瀬村	
寄瀬村	
大井谷村	
同 領	同 領
同 領	同 領
同 領	同 領
同 領	同 領
同 領	同 領

村（三五軒、大原町）の順に、測量日記には書いてあり、内野郷（大原町）が江場土村（岬町）の次に記されている。

伊能大図・中図もそれにもとづいて、江場土村の北に内野郷を書き込んであるが、内野郷（新田村・若山村・深堀村）は、日在村の南にあるべきで、この部分については伊能図は間違っている。また伊能図をみると、「伊能滝村」が小浜村と日在村の間にある。夷隅郡内に、伊能滝村という独立した村は存在しておらず、日記にも伊能滝村の記載はない。大原町深堀の小字に「伊能滝」があり、外に「伊能滝下」・「伊能滝川向」（この小字は大原町若山・新田にもある）等の小字がある。測量隊が「伊能滝」を村と勘違いして、地図に記入したのかもしれない。現在夷隅川とよんでいる川を、伊能大図では「小田喜川」と記している。

（上総国長柄郡に入る）和泉村（一七二軒、寺六、岬町）太東崎（伊能大図によると、岬部分は海岸線ではなく内陸に迂回して測量し、中原村地先から海岸線を測量している）中原村（一八五軒）東浪見村（三六軒、一宮町）市宮村本郷（六〇〇軒）新笈村（四五軒）船頭給村（七七軒）一ツ松郷（五二五軒、長生村）一ツ松郷之内蟹道村・入山津村（一四三軒）幸治村（八二軒、白子町）を経て、七つ後（午後四時過）に中里村（九九軒、白子町）に着いた。宿は中里村の名主五左衛門宅であった。この日の小浜村から中里村までの測量距離は、五里二町五〇間（一一八八〇尺）であった。夜間の天体観測では、三五度二五分であった。五左衛門家は地引網主で酒造りもおこなついていた。屋敷は円頓寺の西隣で、屋敷内には築山があつたという。領主から苗字帯刀を許され、御園姓を名乗つていた。伊能図の里程表によると、五左衛門家は、海岸線から一三町三九間（一四一八尺）離れていた。屋敷は円頓寺の西隣で、屋敷内には築山があつたという。

屋敷跡は現在畠地となつていて、

第二六日 中里から本須賀まで（白子町・成東町）

七月一五日 六つ半頃（午前七時頃）に中里村を出発している。この日は霧が深く、方位をはかることができず、測量ははからなかつた。鷺村（二二軒）八斗村（四一軒、地引網二帖）五井村（六一軒、五二〇人、地引網五帖）古所村（九一軒、地引網二帖）剃金村（五二軒）牛込村（六一軒）浜宿村（五九軒）（上総国山辺郡に入る）四天寄村（二〇〇軒、大綱白里町）今泉村（二五〇軒、一一〇〇人）真龜村（一三〇軒、七五〇人、九十九里町）不動堂村（五二軒、二七五人）貝塚村（三二軒、一五六人）藤下村（四五軒）細屋敷村（一四軒）西野村（八二軒）栗生村（一三二軒）片貝村（四八五軒）田中新生村（六五軒）小関村（一三〇軒）作田村（一一六軒）（武射郡に入る）を経て、七つ頃（午後四時頃）に本須賀村（一七二軒、成東町）に着いた。宿は五左衛門宅であった。この日の中里村から本須賀村までの測量距離は、三里二八町五四間（一四八五〇・二八尺）であった。天体観測用測器の継ぎ送りが遅れ、夜になつて荷物が到着したため、夜間の天体観測は出来なかつた。

この日の宿泊先であつた五左衛門家は、現在の行木幹雄家である。江戸時代の行木家は、現在の鳴浜農協の場所にあつた。行木家墓地にある「中興碑」（明治四十年建）の一節に、「我家享保以来富豪鳴近隣」とあり、忠敬が宿泊した当時の五左衛門家は、地引網主として栄えていた家であつた。近くにある大正寺の行木家墓地には、元禄・享保年間の宝篋印塔があり、往時を偲ばせている。

この日の日記のなかに、塩高の記録と地引網についての記事がある。

鶴村（塩高四石余）、八斗村（塩高九石余）、古所村（一〇石八斗余塩場分）、西野村（高二石九斗浜方塩場）、栗生村（高一石浜と、塩生産にかかる年貢高が記されている。また八斗村・五井村・古所村について、当時の地引網の数が記されている。この九十九里浜の地引網漁業は、江戸時代を代表する日本有数の漁業であり、そこでとれる鰯は干鰯・粕に加工され、肥料として各地に送られた。小関村は忠敬の生家のある村である。忠敬は小関村の小関五郎左衛門家に、延享二年（一七四五）一月一一日に生まれた。幼名を三次郎という。小関家も地引網主の家であった。七才の時に母が亡くなつたため、婿であつた父は、忠敬の兄・姉を連れて実家の神保家（武射郡小堤村・横芝町）に帰つた。忠敬が父に引き取られたのは十一才の時といわれている。忠敬が測量のために小関村の海岸線を通過した時に、迎え出た昔の幼馴染みに、「ここで三次、三次郎と呼ばないでくれ、三次郎の名だけは遠慮してほしい」と笑いながら言い、思いでにふけつていていたと伝えられている（九十九里町教育委員会「伊能忠敬出生の地」）。

忠敬の出生地小関家の跡地（九十九里町小関一四五ー四）は、昭和四年に千葉県指定史跡となり、現在公園として整備され、測量する伊能忠敬像が建立されている。九十九里地域と忠敬の関係は深い。栗生村の大地引網主であった飯高惣兵衛（尚寛）とは親交が深く、また片貝の布留川家出身の盛右衛門は、忠敬の長女稻の婿となつていて。海岸線から約四キロほど入った宿村（東金市）の小川新兵衛家※の娘りてが、景敬（忠敬の長男）に嫁いでいる。後年文化一〇年（一八一三）に景敬が四人歳で亡くなると、稻（妙薰）と、りての女性二人が、江戸にいた忠敬の指導のもとに、佐原の伊能家をまもるのである。

※忠敬の長男景敬の妻りての実家は、「上総国東土川村小川治兵衛の娘」（大谷亮吉編著『伊能忠敬』）と、されてきたが、小川新兵衛家であることが、佐久間達夫により紹介されている。

（佐久間達夫著「伊能忠敬の下総上総安房国測量」平成九年）

第二七日 本須賀から屋形まで（成東町・横芝町）

七月一六日 この日は朝から晴れており、六つ半頃（午前七時本須賀村を出発している。井之内村（一〇五軒）松ヶ谷村（二五三軒）小松村（七九軒）木戸村（九八軒）蓮沼村（四七二軒）蓮沼村）を経て、午前中に屋形村（一八三軒、横芝町）に着いた。名主の海保兵右衛門宅に泊まつて、この日の本須賀村から屋形村までの測量距離は二里一五町一間（九四三六・八二尺）であつた。

「此所ヨリ同郡小堤村江立寄、七つ半頃（午後五時頃）ニ帰ル」と忠敬は日記に記している。この日の午後、忠敬は小堤村（横芝町）にある実家の神保家に立ち寄つてゐるのである。父の貞恒は天明二年（一七八二）一月に、七三才で亡くなつてゐた。忠敬の兄の貞詮は、この年（一七八二）十一月に六四歳で亡くなつてゐるから、この日の訪問が兄と会つた最後の機会であつた。屋形村の海保兵右衛門家は、海保一族の本家である長左衛門家からの分家で、屋号を東隱居といふ。地引網主で、この頃名主を勤めていた。無量寺にある墓碑銘によると、忠敬が泊まつた時の当主海保兵右衛門豊昌は、多才な人で、弓術・剣道・柔術・医学・俳諧、さらに測量まで身につけていたといふ。兵右衛門家は、伊能図の里程表によると、海岸線から一九町五〇間（二一六二尺）離れていた。小字で荒場といふ、現在家はない。屋敷跡地にある楠の巨木等が往時をしのばせている。



写真説明「兵右衛門家跡地に建てられた測量碑。碑文は次の通り。

(表) 全国沿海州測量開始二〇〇周年 伊能忠敬宿泊地観測地(海保兵右衛門家跡)

(妻) 亨和元年(一八〇一) 旧暦七月十六日夜 天体観測
上総国武射郡屋形浜 緯度確定「北緯三五度三六分半」

平成十一年九月吉日 横芝町

第二八日 屋形から井戸野まで (横芝町→旭市)

七月一七日 この日は朝から晴れしており、六つ半後(午前七時過)に屋形村を出発している。国界(下総国匝瑳郡に入る)木戸村(光町)惣領村(一三二軒)西柏田村(八三軒、野栄町)東柏田村(二二〇軒)川部村(一六二軒)堀川村(一六〇軒、浦東西百四拾五間)新堀村(七

〇軒、浦境迄東西四百壹間三尺)今泉村(一七〇軒、浦通り武百九拾八間)野手村(五八〇軒、浦東西千八拾間)長谷村(磯辺東西六百間余、八日市場市)吉崎村(一六〇軒)東小笹村(四六軒)駒込村(五六軒、旭市)神宮寺村を経て井戸野村(三一八軒)に六つ半後(午後七時過)に着いている。

この日に通過した村の記事の中に、海岸線の間数を記した村がいくつかみられる。朝出発してから着くまでに十二時間かかっており、房総沿岸の測量では最も長時間かかった日である。この日の屋形村から神宮寺村までの測量距離は、三里二八町五七間半(一四八五六・六四比)であった。宿泊先は井戸野村の名主庄左衛門宅であった。忠敬だけは太田村(旭市)の加瀬左兵衛宅に泊まっている。太田村の加瀬左兵衛は、忠敬の次女篠の嫁ぎ先である。しかし篠は嫁いで間もない天明八年(一七八八)に、亡くなっている。忠敬が泊まつたこの加瀬家の場所は、確定されていない。井戸野村の名主庄左衛門家は、椿海を開削した新川の才蔵橋近くの字古屋にあり、伊能図の里程表によると、海岸線から三〇町五〇間(三三六一尺)離れていた。現在の石橋守雄家である。現当主は四代目と伝えられており、昭和四九年に建て替えるまでの家は、三五〇年前に建てられた手斧削りの家だったという。

第二九日 井戸野から飯沼まで (旭市→銚子市)

七月一八日 この日は朝から晴れしており、六つ半前(午前七時前)に井戸野村を出発している。

(下総国海上郡に入る)中谷里村(二二〇軒)仁玉村(九三軒)十日市場村足河村椎名内村(一五〇軒、浜東西凡三百間)西足洗村(七九軒、浜東西凡七拾五間)野中村(九六軒、浜武百八拾八間武尺)東足洗村(八〇軒、浦東西三百間余)三川村(二五〇軒)横根

村（六〇軒）萩園村（三三二軒、飯岡町）行内村 平松村 飯岡村（九〇軒）下永井村（一一〇軒）上永井村（二八軒）小濱村（五七軒、銚子市）三崎村（六〇軒）邊田村（七五軒）を経て、銚子港飯沼村（二二一九軒）東町に着いた。銚子は当時の房総半島で最も人口の多い町であつた。醤油業・漁業・東廻り航路に伴う海運・利根川の水運と経済的に最も活気のある町であつた。

宿は田中吉之丞家であつた。この日の神宮寺村から飯沼村までの測量距離は、六里二三町九間（二五九二三・三八ばい）。夜間の天体観測では、三五度四三分の数値を得ている。田中吉之丞家は、銚子で最も有名な商人であつた田中玄蕃家の分家であり、玄蕃家に隣接していた※。この地に両家とも今はない。忠敬が銚子に着いた日に、佐原から伊能三郎右衛門、伊能平右衛門・繁蔵（親戚）、清宮亀太郎（清宮利右衛門家の長男で、当時十七才、清宮秀堅の父）、久保木太郎右衛門（清淵）、伊能七左衛門（親戚）の六人が、銚子まで忠敬を見舞いに来ている。伊能三郎右衛門は忠敬の長男で、忠敬のあとをついた伊能家の当主、久保木太郎右衛門は津宮村に住む忠敬の友人で、儒学者としても名高かつた。この第二次測量に参加して、いた慶助も久保木清淵に学び、のちに忠敬が九州測量中の時、忠敬の孫の三次郎（忠誨）も、久保木清淵のところで学んでいる。忠敬が幕府役人に取り立てられて全国測量に従事してから、測量隊は「御用天文方」と記した御用旗を持参したが、この旗の文字を書いたのも久保木清淵である。忠敬の死後、「大日本沿海輿地全図」と「大日本実測録」の完成にも尽力した。忠敬は銚子で、久保木清淵にこれまでに測量してきた武藏・相模・伊豆・安房・上総・下総の沿岸地図の下書き作成を依頼している。

※佐久間達夫著「伊能忠敬の下総上総安房国測量」による。

第三十日～第三七日 飯沼村（銚子市）

忠敬は七月二六日までの八日間銚子に滞在した。七月一九日には高神村（三〇六軒）の大若岬より測量を開始し、飯沼村の黒生まで測つた。午後には夕立があり、七つ半（午後五時頃）に帰宿している。二〇日は忠敬、病気のため測量には出ず、郡藏・宗平・秀蔵・慶助の四人で、飯沼村の黒生から、和田・伊貝根迄を測量した。午後より大雨のため測量は中止している。この雨はその後も降り続き、二二日まで止んでいた。二三日に飯沼村東町河岸より新生村（二八七軒）・荒野村（七八三軒）・今宮村（三三二軒）河岸と常陸国東下村波崎の渡しの方位・間数を測つて、こうした銚子内での測量距離は、二里三四町四間（一一五六七・二八ばい）に達している。その後は遠測と日食の観測を行つて、二四日は晴れていたが、海面の見通しがきかなかつた。「佐原ヨリ見舞ノ者段々ニ帰ル」とあり、佐原から忠敬を見舞に来た親戚・知人たちも佐原に帰つて、二五日の午後に筑波山と日光山の方位を測つて、二六日は晴天で、日の出の時刻に、大若岬にて、慶助が富士山の方位を測つた。忠敬はその時のこと、次のように書いている。「銚子に着いて、一九日より富士山の方位を測ろうとして、日々手分けして高い場所に上つたり遠出したが、毎日濛氣が多く、富士山を見ることが出来なかつた。この朝ようやく富士山を測ることが出来た。その喜びははかりしれない」。忠敬たちは高い場所を探して、遠測を試みたらしいが、そのなかには人工の建造物もあつたらしい。「信田權右衛門・清左衛門櫓ヨリ金華山石之巻見ル」とのメモがある。この櫓がどんなものかはわからないが、後に平山宗平は、この信田權右衛門家に養子に入つて、忠敬の病気も全快し、この日小名浜（福島県いわき市）までの先触れを出している。

七月二七日（太陽暦では九月四日）の六つ半後（午前七時過）に飯沼村を出發し、利根川を越えて対岸の常陸国鹿島郡東下村の波崎（茨城県波崎町）に向かつた。

4 房総測量のまとめ

忠敬の房総沿岸測量日数は、享和元年六月十九日から七月二六日までの三八日間であった。深川から銚子の飯沼村までの房総沿岸の測量距離は、計八八里四八町一間（三四八六七六尺）余である。その後忠敬たちは、常陸国（茨城県）・陸奥国（福島・宮城・岩手・青森県）の海岸線を測量し、下北半島をめぐり、津軽半島北端の三厩村まで北上した。その後青森・野辺地・盛岡・仙台と東北道を南下し、江戸に帰着したのは、享和元年（一八〇二）十二月七日であった。四月二日に江戸を出發してから二四二日の測量の旅を行つたのである。この第二次測量の全行程の測量距離は、八〇七里一七町四八間（三、一四九、二四〇・三六尺）であった。この第二次測量について、幕府は忠敬に一日につき、銀一〇匁、二四二日分として計金四〇両一分余を手当として支給している。この金額で人馬の賃錢、旅籠代、弟子・小者の雜用、測量器具の新調と修復など、この旅のすべて賄つたのである。僕約をしても、幕府から支給された金額では足りず、忠敬はこの測量の旅に約六〇両の自己負担をしている。宿泊先への支払いは、忠敬一人一五〇文、召し連れた弟子たちは一人につき一二四文、小者は一〇〇文と定め、逗留日数が長引いた時には、茶代として、金二朱・金一分を余分に支払つたらしい。

忠敬にとつてこの測量の旅は、地図を作製することと、もう一つの目的があつた。それは緯度一度の長さを確定することであった。この

点については、七月二日付けの至時の忠敬への手紙にも、後世になつても、覆される事のないような数値を出すようにと、忠敬を激励している。

〔別而此度ハ地上一度ノ里数モ精密ニ御測量モ相成可申候間、甚大切之御測量ニ候、後世ニ而大精密家出候トモ、翻ル事無之様被成 置候事万々相祈候」※

第一次測量で蝦夷地まで出かけたのも、江戸から遠く離れた場所に行き、その間の距離と緯度の差で、緯度一度の長さを確定したかったからである。地図を描くためにも、この正確な数値が必要だった。蝦夷地測量の時は、歩測で距離を測つたこともあり、忠敬は南北一度の距離を、二七里余と計算し、それにもとづいて地図を作製している。忠敬は、房総沿岸を測量した時に、緯度と測量距離からこの計算を行つてはいる。例えば深川から五井村までの測量結果で、「一度を一八里三四」と計算し、岩和田村から銚子飯沼村までの測量結果から、「一度を二八里四二」と計算している。江戸に帰つてから忠敬は、最終的に緯度「一度を二八里一分」（二八里七町一二間）と定めたが、これは安房・上総九十九里、下総・常陸の海岸線の測量から得た数値であつた。師の高橋至時はこの数値に若干の疑念を抱いていたが、のちに忠敬の数値が正しかつたことを認めてはいる。江戸に帰つてから忠敬は、この測量の成果として大図（三万六千分一）を三三枚、中図（二十一万六千分一）を二枚、小図（四十三万二千分一）を一枚、計三五枚の地図を作製した。この地図について至時は、「大図の大きさは二疊くらいで、画工に彩色をさせたために、風景が見事に描かれています」と、述べている。忠敬はこのうち大図と小図を幕府に提出したが、伊能家にも東日本沿岸地図の大図三二枚が伝えられ、現在佐原市伊能忠敬記念館

が所蔵している。今回の調査で忠敬が宿泊した場所がどこであつたかを確認することも目的の一つであつた。一行は房総の地で三七泊している。その内、同じ家に泊まつたのは、州崎村（館山市）の四泊と飯沼村（銚子市）の九泊の二ヶ所だけであり、あとの一四泊はすべて一泊であつた。泊まつた家は、名主の家一六、身分的な表記のない家四、寺三、宿屋一、宿泊先の表記のない村二（勝浦村・小浜村）となつてゐる。身分的表記の無い家の場合も、その村で名主クラスの格式や富豪で知られていたような家であり、宿泊先の選定には、それなりに事前の調査があつたようと思われる。その名主の家の場所を確定するのには意外に手間取つた。当該『市町村史』をひもといて、その村の名主についての記述があるかどうか調べてみても、記述されている例は意外に少ないのである。そのなかで『鋸南町史』は、唯一かなり具体的に名主の家について記述しており大変参考になつた。

※ 高橋至時書状『天文曆学諸家書簡集』所収 書簡（二十一）

追記

江戸時代の名主家の存在について、次の方々をはじめ多くの方々のお世話をになりました。末筆ながらお礼を申し上げます。

青柳至彦氏（市原市）、高崎繁雄氏（木更津市）、笛生卓義氏（鋸南町）、鈴木寅吉氏（館山市）、田辺豊次氏（館山市）、滝口和一氏（東京都）、神田宥賢氏（天津小湊町）、行木幹雄氏（成東町）、海保英之氏（横芝町）

を確認することも目的の一つであつた。一行は房総の地で三七泊して

五島觀光歴史資料館の榎田さんにおねだりして、玉の浦椿の苗木を頂いた。同行の浅井、本郷、江口会員と共に、その苗木を平戸・長崎と大切に抱えて歩き、それぞれの家に持ち帰つた。

玉の浦椿はヤブ椿の突然変異で白い覆輪をもち氣品のある美しさで人々を引きつける。約二十年前に、福江島玉之浦の山林の中で発見され、大変なブームを起こしたとの事。

この貴重な苗木を育て、花が咲いたらどんなに素敵だろう。『そう、忠敬先生のお墓にも』と思いつき、一番元気そうな苗木を佐原の觀福寺に運んだ。それから墓参のたびに確かめ、春を待ち侘びた。わが家の鉢の小さな枝に、赤い薔薇を見つけた時の嬉しさ。そして三月半ば、佐原の椿も大きな蕾を抱えているのを確認。いつ咲くだろうと気が気ではなかつたが、東京から毎日見に行く訳にはいかない。

念のためにと園芸マニアの大庭さん（伊能ウオーケ隊員）にお預けしてあつた椿が見事に咲いたのは、四月の初めだつた。白い覆輪は細いけれど、紛れもなく玉の浦椿。わが家のは、赤く小さく白い縁どりは無し。浅井さんからも立派に咲かせた玉の浦椿の写真が届いた。そして一緒にお墓の横に植樹をし、常に気を掛けてくれた佐原の本郷さんから、かすかな覆輪をつけた赤い椿が咲いている写真を受け取つた。遙かに遠い福江島に眠つてゐる坂部さんを偲ぶのに相応しい花が、忠敬の墓所に咲いた。五島の榎田さんにお知らせすると、大変感激しくださつた。来年はもっと立派な花が咲くでしよう。

幾つも花をつれた椿の木を夢見て、楽しみがまたひとつ膨らんだ。

玉の浦椿

（おわり）

（伊能陽子）

伊能家より —佐原伊能家を訪れた人々—

千古不滅

千古不滅

おおが いちろう (一八八三—一九六五)

大正・昭和期の植物学者。八高教授をへて満鉄に入社。中国東北地方の普蘭店から出土した古ハスの種子を研究。敗戦後、千葉県滑川出土(約一千年前)と検見川出土(約二千年前)からハスの種子の発芽に成功。一九五二年検見川出土のものは開花しハ大賀ハス▽として知られた。(三省堂コンサイス人名辞典)

千古不滅
大賀一郎

徳山測量と平山郡蔵の榜紛失事件（二）

伊藤栄子

会報第三号、佐久間達夫氏執筆の「伊能忠敬の江戸在住の江戸在住日記」の中に、平山郡蔵と小坂寛平の二人が忠敬から破門された一文がある。平山郡蔵については、以前から測量記録の文書を読んでいて、少々目立つ存在だったので興味があつた。

平山郡蔵の経歴については、佐久間氏が詳細に述べておられるので省略するが、以前、私が解説した徳山毛利家文書の測量記録の中に、平山郡蔵が袴を紛失した事件が記されていて紹介したい。徳山毛利家文書では測量の過程を、日々事細かに、記録しているが、個人に關する書留めは極めてすくないので印象に残っている。

防長（周防、長門）の中の徳山藩

徳山毛利家は知行三万石、徳山はその城下町である。萩の本藩（三六万九千石）の支藩として、何かにつけて指示を受け、協力をする密接な関係にあつた。第五次測量の先触は文化二丑二月には、時の老中戸田采女正の名で徳山藩へ達していた。それにもない藩では測量隊員を迎える準備を着々と進めていた。

まず測量地の徳山藩や防長両国の沿革をながめてみよう。萩の毛利の支藩は、徳山藩のほか長府・毛利氏（五万石）、清末・毛利氏（二万石）、岩国・吉川氏（六万石）の四家があつた。清末・毛利氏は長府・

毛利氏の分家である。四家の成立は古く、慶長五年一月、毛利輝元は防長地方への移封の時、吉川広家に玖珂・大島の二郡で三万石、毛利秀元に長府で三万六千二百石を分知し、東西の二つの口を固めさせた。これが岩国藩と長府藩の起こりである。

その後分知の高も夫々変遷があつたが、支藩として宗藩を支えてきた。ただし岩国・吉川氏は長い間、本藩の家老のような補佐役を務めていた関係から、諸侯の列には加えられず、文久になつてから末家として幕府に届けられた。そのため文化武鑑に岩国藩の記載はない。

元和三年二月萩の毛利輝元は次男就隆に都濃郡二五カ村と熊毛郡一カ村で三万一千余石を分知した。就隆は寛永八年に下松に居を構え、同一一年幕府の承認を得て下松藩を興した。下松の地は東に偏ついたため、野上に移り野上を徳山と改めた。以後この下松藩を徳山藩と呼ぶようになる。

しかし徳山藩も藩主毛利元次の代になつて、萩領との山林境界争いから、幕府の介入を許してしまい、正徳六年四月（一七一六）改易となる。徳山領は萩の本藩へ還付された。その後旧家臣らによつて徳山藩再興運動が起こり、將軍吉宗のとき幕閣の意向が変わつて、享保四年五月（一七一九）藩の再興が認められた。

改易問題や多少の確執があつて、これら四末家は元就の三矢の家訓のようにはいかなかつたが、ともかくも四家とも明治維新まで存続した。

末家は家督相続や祝儀など、何かにつけて萩へ赴き、登城して札を尽してきた。これを「出萩」と呼んでいる。防長の中での小規模な参勤交代ともいえるものであつた。滞在期間は一と月たらずである。「出萩」の時期は各末家によつて違い、明和期になつて幕府の許可を得て整つたものである。

徳山藩領略図

毛利本藩と領地が交錯しているが、
村名のある部分が徳山領である。



享保六年から万延元年迄、徳山藩主の「出萩」は一二回（広島大教授、小川国治氏作成「御末家方御出萩年号書寄」）各藩とも、江戸幕府への参勤交代の間をぬつて行われた。

この習わしは時とともに定着し、相互の文化の交流などに役立つていた。こうした状況の中で、伊能測量のとき働いた徳山藩御抱絵師・朝倉湖内は萩の雲谷家へ行き、雲谷等徴・等竺父子に師事して、絵を修行し等圭の号をうけていた。また、萩藩の地図師の祖といわれる有馬喜惣太の孫、有馬詠次について地図方の手ほどきからはじめて、地図作りを一〇年間も学んでいた。

伊能忠敬の防長への来訪は、は文化三、六、八、一〇年の四回であった。湖内はその都度全面的に測量方に協力をしている。ちなみに岩国藩は雲谷派と狩野派の二家の絵師を抱えて待機していたが、測量隊はこの地をたつた二日で通過してしまった。湖内が事前調査の略図を提出した以外に絵師の測量への関与はなかつた。

測量の前後

どの地方でも受入れ側にとつて最も気になることは、測量隊が今どの辺までできているか、他の場所ではどの様な取り扱いをしたかを早く知ることである。各村は先触れを受けると、すぐ通過地へ人を出して情報収集をはかり、対応を考えていた。

徳山では測量方から、村で用意する絵図は一丁一寸の割で書くようと連絡があり、用意していたが、芸州では一丁六分の割で差し出したところ、測量方が大変気に入つたという。早速、藩の仕置きを担当する御蔵本から六分の割に変更するよう御達しが出る。絵師・朝倉湖内は大急ぎで、またまた島々を廻り、村役人

の船で図を取りなおす。こうして測量隊の到着一ヶ月前には村絵図は書き改められていた。

提出する村絵図に対する忠敬の注文は大へん厳しく、絵図の作成と庄屋の心得については次のように記されている。

一、島々の廻りは岩組まで随分念を入れよ

一、離れ島の間数を改めよ

一、塩浜はごふん（日本画の顔料）で書き入れ、絵図面へ記すこと。

これは今迄よりも一段と細かい指示であった。また庄屋の心得については

一、庄屋初め村役人名札入申候事
何殿領分、何国何郡何村

奉書にて三寸五歩位にして、村境にて差出候事 ひな形左之通
何州何郡何村

大庄屋 誰

一、かぶら、大根、人参、せり、鳥、卵、長いも、蓮根、くわい、豆腐、栗、菜、菜類、椎茸、鰹節、但し鰹節は煮出し、その汁で炊物にして、花鰹を上へかけるのがよい。

この様にすい分細かいところまで書きとめている。これは、徳山に限つたことではなく、第五次測量の対象となつた山陽道の各地の書き留めを見ると、次々に伝えられた内容であった。

藩では高齢の忠敬のために、医師、町按摩、針師を特に待機させた。ほかに髪結 仕立屋（隊員の衣類の縫いや下着の仕立のためであろうか、初見である）

また賄の覚書を見ると

一、味噌汁に生魚類は入れない事 汁は鰹節を沢山用いる事
一、魚類、かまぼこ類、すり身、麸、きくらげ、ゆば、いりこ、は

全く不向である事

一、禁物といつても、鯛類焼物は御屋に召し上つた由、また中鯛の浜焼も召しあがる由

一、酒は御好みではないが、小盃は出してよい。

但し御休みの節、夜中床に入つてから、下部の者達は酒を好むようであるから少し出すこと。このとき、肴も入用と聞いている。これは上部へは隠し置く事。

氣むずかしい忠敬先生に神経を使い、そのうえ下部の頼みも聞入れる。村役人の心遣いであろうか。村方の書留めは正直でおもしろい。

能き物

一、萩横目船手付廻り之節、船賄等仕向左之通
とあって、萩から横目が来ていて測量方の近くに宿をとり、船手にも付添つてることが分る。横目は監察役である。準備は万端整つていた。

4月20日 測量方役人の内、一の手が船路で徳山領境の鯉力浜に揚陸した。通路を測りながら西市の旅宿へ入る。

一の手は伊能忠敬、内弟子の平山郡藏、小坂寛平、下部二人である。この度は四手の編成で逐次到着の手筈になつていた。

21日 一の手五人は西市宿を日の出頃出立、徳山の町中の香力川境目から栗屋川迄測り、糸子町、新宮東開作土手まで廻量して、同日夕七ツ時頃御客屋へ入る。七ツは四時ころ。

22日 日の出頃御出立、旅宿の御客屋（藩の来客接待所）前から海岸に添つて住吉神社海辺、さらに22日打留の所まで測り、蛇島へ渡る。蛇島を廻量して同日八ツ半（三時ころ）頃浜崎へ着。

23日 朝六ツ時より仙島へ渡る。東筏から南浦廻り黒神島・宮の原迄測量を済まし、夜に入り六ツ半（夜七時）帰着。この仙島と黒神（髪）島は、わずかに繋つていて、一つの島であつた。しかし地元では夫々別名で呼んでいる。この日残りの隊員も全部到着した。

24日 朝六ツ時頃から仙島へ渡り、昨日打ち切りの所より北浦廻りで、黒神宮の原まで測量残らず済み、暮時着船。

25日 日の出過ぎに宿を出て、浜崎浦、磯辺通り、江口新開作、道源開作、野村開作、西小島まですべて終る。（開作といふのは海を埋め立て、塩田や農地にした土地）

忠敬はこの測量では決して無理をしていない。比較的早めに切りあ

げている。今年61才の年ばかりとはいえない面があつた。旅先での越年もあり、体にこたえたのであろう。
それでも忠敬は、行く先々で旅宿の近くの見晴しの良い場所に、一〇坪程の囲いを作らせ観測器具を持ち込み、晴天の夜は星の観測を怠らなかつた。

藩では忠敬と高橋善助には特に気を遣つていた。宿の部屋も忠敬と善助は同室であつた。備前からの聞き書きによれば、伊能殿は御小人目付格式位、高橋殿は御徒目付格式位、其外は同心之類之扱と相聞候事と記されている。高橋善助は江戸領暦所の高橋至時の弟で、第五次測量には副隊長格で参加した。後に天文方・渋川家を経ぎ渋川景佑となる。

二の手

23日夜半過ぎより御客屋出立、浜崎から乗船し大津、刈尾へ24日未明に着、直ちに沖浦まで測り、刈尾浦のすぐ前方に見えるかば島も測量し夜五ツ半（九時）御客屋へ帰る。

25日昨夜九ツ半（午前一時）より野島へ渡船し未明に着。野島は徳山湾では最も遠い海上にあり、その昔、藩の流刑地であつたという。本浦家前より西へ廻り、沖浦まで廻量し夜五ツ半帰着。

26日昨夜九ツ時過ぎ出船、福川村境津木へ未明に着の所、雨天に付き滞船する。

27日昼過ぎ室尾浜より測量開始、戸浜の民家へ止宿

28日早朝戸浜から測り始め、富海村、萩領の田辺まで廻量して、その夜五ツ過ぎ集合地の中の閑へ着いた。

連日の夜半からの作業である。いつ睡眠をとるのであろうか。雨で

も降るとほつとする。三、四の手の測量についても、ほぼ同様であった。とにかく雨間を見て島々の間を廻り測量を済ませている。島の多い徳山湾の測量に、隊員の間から特に文句もいわれず、湾内や沿岸の測量が速やかに終つたことは、藩を挙げての協力と、伊能隊に提出された村絵図が地図師の手で、よく調べられていたことが、大いに役立つたのではないだろうか。

徳山領沿海の測量に動員された船団の規模は、御用意記の記録によると、つぎのよう稀に見る大規模なものであった。御手といふ以外の船用意はすべて民間からの借り上げである。

御手船八艘并右付艤毫艘御手船也（御手船は藩の持船）

三〇石船十四艘

渡海船九艘

漁船一一四艘

艤 十艘

御手舸子十六人（御手舸子は藩直属の舸子）

浦舸子五五七人

外に通い雇一人
以上

参考文献

*「徳山毛利家文書（御用意記）」山口県立文書館蔵
*「続・徳山毛利家における伊能測量」『地図一四五号』渡辺一郎・伊藤栄子

右の数字は、二日以上召し仕えた役船のみを記し、一日以下は記さないと書かれているから、実際の数はもつと多い筈である。

浦舸子の人数にしても、寛保元年（一七四一）の徳山藩御領内町方目安によれば、徳山村の人口は二、五〇九人、徳山本町は一三八〇人で、その他の村々はとても千人には満たない漁村であつたから、おのずと舸子として使える人数は限られる。

数日の間に五五七人という舸子が交互に動員されたのでは、小さな漁村では漁に出られない日もあつたと考えられる。

隊員や付人、役人達の賄用の魚は、事前に生簀で囲つて確保された。また、急仕立の給仕人は、成人前の男の子に前髪をつけさせ、袴を着せて務めさせた。人を集めにも苦労した様子がわかる。

測量隊の二の手以下は全て船路で次の測量地、中の関へ向つた。忠敬の一の手については、

「右26日四ツ時過ぎ（十時ころ）出足にて、中の関へ夜五ツ半時着、付届相済候 尤、病氣三付陸地罷越候也」

と記されていて、忠敬が病氣のため船路でなく、陸路で中の関に向つたと記している。忠敬はこのころから保養の必要な状態になつて、次の測量には加わらず暫の間、藤曲（宇都市）で休むことになった。

（以下次号）

天涯地角幾山川

計測図成千古伝

精緻驚人何足恠

櫛風沐雨十餘年

蜻洲 高島平三郎把拝書

※恠=怪

天涯地角幾山川
計測図成千古伝
精緻驚人何足恠
櫛風沐雨十餘年
楊風沐雨十餘年
高島平三郎把拝書

たかしま へいざぶろう (一八六五—一九四六)

明治・大正期の体育学・児童心理学者。児童学研究の草分け。明治後期に児童心理学に基づく教育を主唱。また体育学の代表的な理論を樹立した。苦学しながらの研究は広く、その他師範学校用の内外教育史を書いた。(三省堂コンサイス人名辞典)

屋久島「伊能の碑」

幕府御用で、日本全国を測量した伊能忠敬は、文化九年（一八一二）三月二十七日から四月二十日にかけて屋久島に滞在し測量を行った。

これによつて得られたデータを基に、文政四年（一八二二）門人らの手で屋久島の三万六千分の一の地図が完成し幕府へ提出された。

屋久島は、忠敬測量の最南端地点であった。

ここに伊能忠敬測量開始二百年を記念し、伊能の碑を建立するものである。

平成十二年六月吉日

上屋久町

伊能の碑



平成十二年六月、最新の伊能測量顕彰碑が建立された。上屋久町では伊能ウオーカーに合わせて「伊能の碑」を建立、本部隊員の屋久島到着を待つて除幕式を行つた。悠悠と流れる宮之浦川のほとり、矢野市長はじめ地元関係者とウォーカーたち一六〇名が参加した。

一年経つた今年五月、上屋久町に招かれて伊能洋・陽子が屋久島ツーデーマーチに参加した。そして「伊能の碑」の傍らに、町長とともに植樹を行つた。現在では珍重されている、屋久種子五葉松の若々しい苗木である。魅力溢れる屋久島に、五葉松の成長を確かめに行く楽しみを残して來た。

（伊能陽子）

動き出した西国測量

安藤 由紀子

二十八・二里

第一ステージ(第一次～四次測量)で、琵琶湖東岸から東北の日本の測線は、きれいにつながった。風景なども書き入れ、素人目で見ても美しく仕上がった。天文方がこれで一応一区切りと考えていたことが、いろいろの理由から推測される。

先ず將軍の上覽に供している。そして上層部は、忠敬のすばらしい成果を見て、西国測量は人數も増やし、いつきにやつてしまおうと考えた節がある。リーダーは忠敬に落ち着くまでには時間がかかった。

高橋至時の同僚は、自分の直属の部下をリーダーに据えたくて、伊能忠敬や間重富の名を出すといやな顔をすると、至時は重富宛に書いている。

至時は、忠敬は老齢でもあることだし、西国は、大坂にいて西に詳しい重富に任せようという心積りだつたらしい。出来上がってみれば、その成果が、生半可な根気と執念では達成できないことを、人は見落としてしまうものだ。



第一ステージでは、ほぼ正確な美しい地図を作ったのと同様に、重要な天文学的課題もかかえていた。緯度一度に相当する地表の距離を出すこと(これを『度法』という)、日・月食の観測をすることによって、外国の基準点に対する日本の基準点の経度の差(これを『里差』と

いう)を知ることである。

忠敬が第一次の蝦夷測量で得た値は緯度一度、二七里であった。これはほとんど歩測であつて、さすがの彼にも自信がなかつた。享和二年に提出された第二次の地図の凡例には『北極出地度(北極星の高度)は、海辺の村里及び街道の駅舎で測量したものを記す。地上南北一度は里程測定して、二八里一分とする。これは、海辺所々平坦の地、數十里の間で測つた方位道のりと、北極出地度とを参照して推算したものである』と書かれている。

この年四月、至時が大坂の間重富に送つた書簡を見ると、先生はこの数字に不満だつたことが分かる。この時忠敬は第三次、日本海側測量の直前で江戸にいたから、先生と激論、という場面もあつたらしい。

史料 一 高橋至時書簡 間重富宛 享和二年四月

(前略) 地上一度の里数、昨年の伊能の新しい測定では二八里一分一分は二里十と定めました。これは安房上總九十九里の辺、下總常陸などの海辺ならびに奥州南部より北の方で定めた数です。江戸より北宇都宮までは二十七里半ほどになるが、伊能の考へでは、この間は量程車で測つたので見まちがいもあると思う……これ以外の所ではすべて二八里一分強弱の間なので、この数字は確かにものと主張しますのでそのとおりにさせておきました。私の考へでは、どこでも真に平坦な所というものではなく、……得るところは必ず真平面の数よりは多い方にでるはずです。……しかし伊能は絶対に間違いないと申しますので、それに随つておきました。

もっともこれから、出羽越後海辺へまいりますので、宇都宮やその北までも、間縄をすつと打つて行きたいと申していますから、……もつ

と確かな数値が出ることでしょう。(後略)

この間の事情について、忠敬は次のように言っている。至時先生の次男で後に渋川家を継いだ渋川景祐述の「伊能翁言行録」からの現代語訳を引用する。

史料二 伊能翁言行録

(翁は)二三年を経てようやく、一度の里数測量して二八里二分とす。然るに東岡先生(高橋至時)これを信ぜられず、まだ確数ではないといわれる。その実際の測算を持参してお見せしたが信じてもらえない。

翁は不満で、『先生は何を疑つていらつしやるのですか』すると東岡先生のおつしやるには『あなたを疑つておられるわけではないが、いま私が思つておられる数字より少しだきくなつておられると思われる』翁は『先生が私の申すことをお疑いになるのなら、以後遠国測量は止めにしたい』と思います。このように疑いなさるのなら、これまでの測量も、ことごとく疑つていらしたのでしょうか』といつて憤然とした。先生は翁をなだめ、またまた東海道の方に赴かせたのである。

なかなか強気な弟子で、その実行力を考えて、先生には大いに遠慮している様子が見える。

結論はドラマチックなたちで、一年以上後に出た。堀田撰津守から下賜された「ランデ曆書」に、緯度一度に当たる距離が書かれ、先生みずから訳し換算して、忠敬の結果に「密合」しているのを知つた。享和三年七月に下賜されて、翌文化元年一月五日、先生死去まで

の五ヶ月のあいだのことである。『ここにおいて先生は翁とともに悦ぶこと限りなし』と「言行録」は伝えている。二八・二里は、一一〇・七五kmに相当する。

月食と日食

第一次ステージでは月食と日食が各一回ずつあった。第二次測量の享和元年八月十四日、測量隊は現在のいわき市の北、烏崎村名主利兵衛宅に泊まることになった。

名主宅は海辺に遠く、月食観測に向かなかつたので海辺の百姓の家と庭を借り測量場所を設けた。翌日七ツ半から海辺の家に行つて待機していたが、雲が広がり、終日曇りで観測できなかつた。この時江戸も大坂も曇り、結局三箇所とも無測に終わつた。



第三次測量の享和二年八月一日には日食があつた。

前年つまり月食のあつた年の暮れ、高橋至時は同僚二名と連名で、間重富を実行者とする、西国『里差』測量一件の天文方願書を提出した。これは、八月朔日の日食を利用して長崎の経緯度を確定することを目的とするもので、裏に、帰路、大坂・長崎間の測地と地図を作ることが含まれていた。行きは街道を、帰りは沿海を測量する予定であつた。

この願書に対する許可が遅れていることについて、至時が面白い手紙を書いているので、引用しておこう。

史料三 高橋至時書簡 間重富宛 享和二年一月

(前略)さて、いまだに上より御沙汰のない理由は、勘解由の二次の地図の出来上がりを、お待ちのことと推察されます。一次の地図も一通り評判は良かったのですが、素人目にはあまり面白いものではありませんでした。今年のは、伊豆は一国全部出来、全体の形面白くできていますので、きっとお気に召すのではないかでしょうか。これで思召が進めば、西国の地図もできるのではないかと思います。長崎・対馬・薩摩などの『里差』『北極出地度』などは、私たちにとっては専要のことなのですが、素人の方にはその重要性がお分かりになりません。しかし、眞の地図ができたなら、実際の武備に役立つ事で、観覧のためばかりではありません。(後略)

出発前の表向きの理由は、長崎の日食を利用して、その緯度・経度を測定することで、帰りの沿海地図測量のことは内分だったのだが、『お先触れ』について、大坂町奉行との間でいろいろ行き違いがある。沿海地図測量の方が表面化してしまって、大変にもめた。やはり質屋として自由な商売をしていて、学者でもあった人と、行政の末端にいて武士の扱いを知り尽くしていた忠敬とでは、こんな所にも大きな違いが出てくるのである。

享和二年六月三日重富は大坂を出発した。一週間後れて忠敬は測量三次行の羽越日本海側へ向かつた。

二人の日記と届書を引用しておこう。忠敬は、秋田県の能代にきていた。

史料 四 伊能忠敬測量日記 一 千葉県史料 近世篇

史料 五 伊能忠敬の科学的業績 保柳睦美編著

享和二年八月朔日(中略)午前は時に雲間に日影も見えたが午後より

保柳氏は、次のように書いておられる。

一面薄黒の雲覆い、日形いつさい見えず。しかしハツ頃より測量場へ詰めていて日影を待つ。初め食甚のころ、雲いよいよ深く覆い、復円前によく雲間ニぼんやりした影を見る。大遠鏡、中遠鏡ニ測る。復円のころは、又雲覆い、見えず。

間重富長崎日食測量届書 天文方宛 享和二年八月

(前略)七月十九日同所参着、小瀬戸村の山頂に廿二日より南北線柱え込み普請に掛り、廿四日より参り日夜諸種観測いたしました。八月朔日、風雨ことのほかに強く食甚のころも同様でした。復円のころにいたつて雨は止みました。日体少しも見えず厚い雲いよいよ重なり、日入りに及ぶ迄、日体は少しも見えませんでした。(後略)このようにこの度の日食も、能代・江戸・長崎とも無測度であった。重富は九月八日長崎を発し、帰りは沿海を測量し始めたが、周防国大海村で病氣になり快氣後の測量を期して十一月帰坂の途についた。重富の測量記録はほんの断片しか残っていないが、散逸したか、三カ月後に起こつた大火類焼の結果である。

重富は病弱であった。忠敬より二年前に六一歳でなくなつた。

間重富と西国測量

(前略)西国測量ははじめ間重富が行なう予定であつたが、至時の

死によつて忠敬が行なうようになつたものである。重富は優秀な学者であつた上に、自分が表面に出ない縁の下の仕事も、進んで行なう優れた人物であった。しかしその測量技術や社交性からいっても、もし重富が実施していたら、伊能図のような優れた地図ができなかつたことは確実である。のみならず、根気の点からも日本全図が出来たかどうかすら疑わしい(後略)。

間重富は、伊能図の完成者という功績を彼一人にさらわれてしまつて、不快に思うような小さな人物ではない。弟子である伊能を「地図の師」とよび、後には「伊能先生」と書くような人である。大体この大事業は、もとより忠敬ひとりの手によつて出来たものでは、決してない。

◇

文化元年一月、瀕死の床にあつた高橋至時が亡くなつて、測量の体制はがらりとかわる。後を継いだ高橋景保を補佐するため、間重富は急遽大坂から呼び寄せられた。忠敬の運命も、大きく変化する。西国測量は忠敬の手にゆだねられる事になつた。死の十ヶ月ほど前至時が重富に書いた手紙を「星学手簡」から引用しよう。ランデの著書から忠敬の測量の正確さが判明する前のものである。精密さを命とする科学者らしい厳しい人柄が鮮やかである。

(前略) いずれにしても健康回復され、九州・四国など、あなたの手で測量おできになるよう致したいと思います。今年お試しの上で、お考えお聞かせください。勘解由はご存知の気質、どうかすると、粗

になるのではないかと、そこのところが不安心です。別ニ急ぎませんから、秋に御帰坂後ゆっくりお考え下さい。

勘解由今年は、・・尾張まで参りそれから北へ越前へ出、加賀を通り・・佐渡も一回りの予定です。佐渡は一段の増額になり昨年は、六十両くだされ、当年は佐渡分とも八二両二分くださつて、大いにあります。がたがつております。(後略)

測算などでつじつまあわせがあつたのではないかと、鋭い高橋至時の目は光つていた。強気は粗に通ずるのではないかとのも不安もあつたのだろう。こんなに疑われても、遺骨を先生の墓の隣りに埋めてくれと忠敬が頼んだのは、この科学者の鋭いまなざしへの憧れのしからしめるところであつたろう。

『里差』では運がなかつたが、緯度一度ノ里数を二八・二里とつきとめ、第一ステージは天文学上でも大きな成果をあげたのであつた。

参考文献

有坂隆道 「日本洋学史の研究」

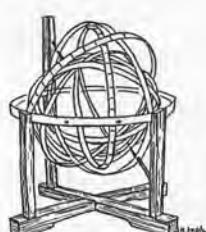
保柳睦美編著 「伊能忠敬の科学的業績」

「伊能忠敬測量日記 一」

千葉県史料 近世篇

創元社

古今書院



史料 六 高橋至時書簡 間重富宛

享和三年二月

対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(二)

入江 正利

信夫(文化八年に対馬で行われた易地聘礼の朝鮮通信使)については、十ヶ年も莫大な人夫を雇いましたので、農民を休ませてやりたいと思います。縄引きについても、下手な人夫を使つたのでは御用に間に合わないのでと評議しておりました。」

前号に引き続き、伊能忠敬と中村郷左衛門の壱岐・郷ノ浦での会話を取り上げる。二人は元禄期に対馬藩が作成した元禄国絵図を見ながら話している。

(絵図六寸壱里ニ而壱里ハ三十六町ニ相極り故)

壱寸ハ六町ニ而三百六十間、壱分ハ三十六間ニ而候故
誠ニ寸分を当り、不調法なから細キ元結ニ而國中之
海辺を引廻、式百余と別レ八郷之分島々之周廻も

皆夫レを以書上さセ可申略義之様ニ而候得共、却而
整ニ繩引可仕よりハ相増り且ハ御賢察之通信夫

ニ付十ヶ年以來莫大之人夫を召仕農民何卒
相養遣し度左候へハ、下タ繩のことも大分下手之
人夫遣イ、然モ御用ニしかとも合申間敷致評議候
故に御座候段申述候處、

郷「不調法ながら細い元結(髪の毛を集めて束ねる紐)で國中の海辺を(地図上で)測り、すべての島々の周囲もそのようにして書上げさせたいと思います。簡単に済まそうとしているようですが、その方が却つて繩を引いて測るより良いのではないでしょうか。御賢察の通

此御絵図ならハ隨分

宜キ被成様ニ而候由仰申候故、乍此上此絵図仮成も
思召候ハ、御測量之御日數御助共ニ相成候、思召

之被成下様共ハ有之間敷哉、御懸命ニ應希候

之段申述候處、先キニも申スことく、隨分其心得ニ而候

御絵図、地理ニハ合可申候得共、天度彼是之所も

有之義ニ而、此僕ニも難渋とかく手數ニ掛見可申由
被仰聞候付、此上など御心変之義奉願候由申述

候處、いつれ對府渡海之上、尚又御座候可申由も
被仰聞、右之御席三天度、地理合候趣之大略

拘御絵図ニ被用候真針之分合ハ委く候得共
磁石其外針之大小様々委敷御物語有之

三百六十之天度故、真針の十二支を一支毎ニ三十分ニ盛り
針を天度・産出し不申候ては本ニの事ニ而

無之候、諸具様々有之、是迄国々相済候絵図

皆々御國へ罷渡候上、御内々見セ可申候、

忠敬が、この御絵図はなかなか良くできているといったので、郷左衛門は嘆願を始める。

「乍此上此絵図仮成も思召候ハ、御測量之御日數御助共ニ相成候、思召之被成下様共ハ有之間敷哉、御懸命ニ應希候」

残念ニ奉存候、乍序水戸儒官赤水氏之被著候

(ここまで読んできて編集子としては当惑した。筆者は、

郷「この上ながら、この絵図をお使いいただければ、御測量の御日数のお助けにもなりましょ。どうぞ（測量をやめるように）お願いたします。」

伊「先にもお話ししたように心得てはいますが、御絵図は地理には合致していますが、天文測量もあるので、このままでは難しい。手数をかけようと思っている」

郷「なよく御考え直しくださいませんでしようか」

伊「いづれ対馬へ海を渡った上で、尚又御話ししましょ」

と、郷左衛門が忠敬に「測量をやめ、国絵図上で計測したほうがいいでしよう」としつこく勧めたように読んでいる。

測量先で、精密な地図があるから、測量しないで地図上で測つて帰つてほしい、などと云われた話はこれまでに例がない。事実とすれば伊能測量の旅についての重大な新発見となるだろう。

慎重な検討が必要と考えたので、入江氏より原文を送つてもらうよう依頼し、本号の宗家文書・対馬藩宗家文庫『測量御用記録』(三) はこれまでとした。あと筆者と打ち合わせて継続したいと思う。参考まで以下解説文のみを掲載する。)

天文方之義も御心得ニ可相成たけ隨分御咄可申由

彼是委曲被 仰候付辱奉存候、少々下タ地など

有之候ハヽ、能キ折からニ候得共、全く存し不申候而

日本図ハ如何御座候哉と相尋見候處、あれハ能く出来ケし申候、あの人ハ全体居ながら聞集たるものと相見序文ニも其趣相見候、夫故所々大分ニ度數の違いも

有之候、先ハ隨分宜く候由被 仰聞、其外何角種々

御懇談ニ及、ケ様御出見候得ハ、最早十年も御参会申候様ニ候、定而御領中も御自分仰附廻ニ而可有之御国ニ

おゐて、寛々可得御意旨被 仰候付、帰國之上尚又御懇命奉希候、御附廻之義二手ニ御分り被成候ハヽ、今一人申付ニて可有之と申候得ハ、いや夫ハ御念入過候、平戸御領ニも

御一人ニ而之由被 仰候付、対州田舎向殊外不調法故、御附廻之もの居合不申候而ハ、所ニ依り御用之滞ニも可被相成候間、此儀ハ私共方へ御任被下候様申候得ハ、然らハ兎も角もニ而候、成丈

御無造作ニ被成度由被仰、扱私儀嶽ノ辻と申此元之高山ニ御上り候節ハ御同道被成度旨、昨日貞兵衛様御約束、然所

風勢若し吹直し順風を一日取失ヒ候得ハ、大ニ相後レ申候後刻天気も晴レ候ハヽ、上船仕度如何可有之哉と申候處

隨分其通り可致候、縛引等之儀ハ御國へ罷渡候上つて御心得安キ事ニ候、御勝手次第御上船候得との義ニ付、後刻之空合次第二可仕旨申上、相應御挨拶之上罷帰ル

随分、くだけた話が出ているから、よほど氣に入られたらしい。長久保赤水の地図評が出たり、そのあと付きまわりが一人では不自由でしようからもう一人つけましょなどと言われている。

阪部との約束は天候が悪く日延べになるが、順風を得たならば乗船して帰島の了解を得る。

ホームページの閲覧状況

1998年1月10日 初版開設

年月	平均ヒット数	MAXヒット数	月日
1998年1~6月	7.6/日		
6~12月	9.4/日		
1999年1~6月	13.1/日		
6~12月	19.7/日		
2000年1~4月	17.6/日		
4~11月	26.1/日		
~11月	52.9/日		
~12月	45.5/日	82	12/20
2001年~1月	63.8/日	231	1/3
~2月	39.0/日	63	2/7
~3月	30.5/日	56	3/5
~4月	28.6/日	60	4/19
~5月	39.7/日	110	5/4

伊能ウオーカーが終わって半年になろうとしている。伊能ブームも昨年、一昨年のような年中無休の報道がなくなつて、ブームも下火になつた気もする。そこでホームページの閲覧状況を調べてみた。昨年11月迄は気の付いたときに記録をメモした程度であつたが、カウンター記録のソフトを導入したので毎日の閲覧数(ヒット数)を知ることが出来ることになった。

紙面の都合でピックアップしたが概略的な傾向は見られると思う。これ

大友正道

を見れば日に日にヒット数は増えているのは事実であるが、伊能ウオーカーの終了と共に一時的に減少したことは否めない。しかし、この閲覧状況を見る限り、今年に入つて日に40前後の閲覧があり衰える所か増加の傾向にあるといつて良い。

ちなみに、開設以来満2年目の平成十二年一月に一萬を記録し、同年十二月末に二万を越え、更に今年八月には三万を越える予想である。

特異現象としては新聞その他の報道によりその日はヒット数が伸びている。例えば今年の1月3日は伊能ウオーカーの終了直後と、NHKの正月時代劇「四千万歩の男—伊能忠敬」の放映があつたためか、231回の最高値を数え、また5月4日には前後の日に比べ3倍強の110回を記録したが、これは武藏野市で行われた歩測大会のイベントがあつたことに依ると思われる。映画「子午線の夢—伊能忠敬」の上映により関心が大きく飛躍する」とを期待したい。

このホームページは会員増強を目的に「伊能忠敬はどんな人であったか—伊能忠敬研究会の【案内】」のタイトルで制作したものであるが、これを見て会員になられた方はどの位あるのであろうか。恐らく余り多くはないのではと思う。会員増強の効果は少ないからこれを廃版にするかどうか、会員の方の意見を伺いたいと思う。

私なりには、伊能忠敬への啓蒙にはお役に立つていると自負している。伊能関連の書籍の紹介・忠敬の略年譜・リンク集など、会員のみならず豊富な資料を活用していただければ、しばらくは続けたいと思う。坂本 謙会員の担当されているホームページ「伊能忠敬研究会資料室」は、現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなど豊富で貴重な資料情報である。これも加わり、今後とも更に充実してゆく所存です。大方のご批判・協力を願いしたい。

ホームページの閲覧状況

1998年 1月10日 初版開設

年 月	平均ヒット数	MAX ヒット数	月 日
1998年 1～6月	7,6 / 日		
6～12月	9,4 / 日		
1999年 1～6月	13,1 / 日		
6～12月	19,7 / 日		
2000年 1～4月	17,6 / 日		
4～11月	26,1 / 日		
11月	52,9 / 日		
12月	45,5 / 日	82	12月 30日
2001年 1月	63,8 / 日	231	1月 3日
2月	39,0 / 日	63	2月 7日
3月	30,5 / 日	56	3月 5日
4月	28,6 / 日	60	4月 19日
5月	39,7 / 日	110	5月 4日



書の登場人物
かつた忠敬
身近に思えて
歩いて日本本地
のもの想像を絶する仕
はず。制作プロセス
が知りたくなつ
た」
「国書館を訪
ね、押むよつにし
（社会部 岩崎 雪弥）

の江戸東京博物館で、伊
能忠敬展」を成功させ、
アームを起した。

公社時代もも、自分
の本領は「企画力」と自任す
る。「十分に中身を練り上げ
てかければ人は動く」。一測
量家の身で幕府を動かした忠
敬は、「一脈通じるものがある。

米国にあると信じていた

公社の方は五十一歳で退職し、警備機器会社の副社長に転身、さらに六十年でパソコンソフト会社を起します。四十九歳で隠居してから名をなしたが、忠敏になぞらつたから「天と地ほど違う」といふべくあがつたそうに打ち消した。

伊能忠敬の「大図」の写しの一枚を見発した
渡辺 一郎さん

「伊能図」には迫力がある一枚の小図を見せてもらひた
る。見た瞬間伝わってくる。
江戸時代の測量の大家・伊能忠敬の研究に携わって二十
六年。国内外に散らばっていながら、測量技術をもとに伊能図
の口コミ情報をもとに伊能図を捜し歩きながら、測量技術
を磨いていった。から忠敬の人物像までの研究
は改めて見てみたい。

渡辺 一郎 さん

読売新聞 01年7月12日 朝刊 「顔」欄より

伊能忠敬の江戸在住日記 (六)

佐久間 達夫

一、第六次測量を終つて江戸帰着の日

から第七次測量出立の日まで (一)

原本
忠敬先生日記 二四

文化六年 (一八〇九)

五月一日 朝より晴。柴山出勤。青木 (注30) 休み。

五月二日 朝より曇る。又晴曇。此日お里て女、三治郎連れ津田御屋敷へ。渡辺忠藏 (注27) 八ツ半頃帰る。永岡屋来る。清

蔵 (注27)、加藤忠司 (注27) へ行く。

五月四日 朝より晴天。深川中町医師飯塚莊一來る。此日、沿海大岡八枚山田綱治郎へかかる。午

中晴。午後曇晴。夜は大曇。お里て、三治郎二十四日より中橋へ行き止宿。

五月二十九日

朝少し晴。又曇る。柴山用事參らず。午前

より晴天。

六月朔日

朝より曇。午前は晴曇。夜は晴て測る。

六月二日

晴曇。尤、曇り晴。桑原へ行く。それより浅草へ行く。お里て、三治郎帰村。弥三郎来る。

六月三日

朝より曇る。弥三郎象限儀を遣す。

六月四日

朝曇。四ツ後より晴天。油屋兵右衛門来る。

六月五日

朝曇。それより曇晴。微雨。藤吉下り行く。

六月六日

朝曇。四ツ後より晴。我等桑原へ行く。

六月八日

朝曇少し雨。四ツ前より晴曇。此日より土用。根来喜内殿へ行く。それより曆局へ行く。

六月九日

朝曇。三ヶ所共罷越。それより御成小路渋江新之助殿へ罷越。弥三郎へ立寄る。

六月一〇日

朝曇。それより少し晴。此日桑原隆朝より初め堀田攝津守殿、林大学頭殿、世話役野々山小右衛門、岡村半平、津田御屋敷へ暑中見舞に行く。此日冷し。

六月二十一日

松平越前守父隱居松平左兵衛督卒去に付、公方様、昨二十二日より定式半減し御着服被為候事、留に付書状を添返上。

六月二十四日

七月一日 朝より晴。午中を測る。夜は曇る。田口弥三郎来る。片貝布留川弥作 (注28)

六月一四日

曇る。秋山松之丞殿へ行く。それより坂部来る。

へ見舞に行く。

六月一六日

曇天。微雨あり。津宮久保木氏帰る。

六月一七日

朝曇。午後より少し晴る。此暮弥三郎象限儀持来る。直ちにかけて測る。

六月一九日

朝曇。午中前後晴曇。我等白木屋へ行く。

六月二日

朝より晴天。夜も晴て測る。五ツ前より曇る。

六月二七日

曇晴。渋江新之助殿より廻状。

成御渡御書付写別紙之通可相達旨、根来喜内殿被相達候様者、別紙相達申候可被得其意候。

廻状遲滞御刻付早々順達留より返却可有之候。以上。

六月二十四日

渋江新之助

野元嘉三次より書状。五ツ半に来る。

此に御座候。以上。

八月朔日 晴天。田口弥三郎来る。治兵衛病氣。測量

御用仰せ渡される。

八月三日 朝より晴天。曆局へ行き測量国々

順書上下云認。暮より曇る。

野元嘉三次様 拝顔可申上候。

伊能勘解由

八月四日

夜前より雨。九ツ後迄降る。それより曇天。

又晴。文助帰る。

八月五日 朝雨。野元嘉三次へ書状遣す。

八月六日 朝より晴天。薩州内野元嘉三次よ

り書状来る。

以手紙致啓上候。秋冷相催候得共、弥、御

安全被成御勤仕珍重の儀奉存候。然者、先日

者誠遠方迄御入被下別而忝奉存候。是より御

伺可申上候處奉恐入候。依之、毎々御面倒の

御事奉存候得共、来る八日十日の内御障事(マ

マ)候はば參上仕候而、猶旁御伺申上置度奉

存候、尤、両日御故障も御座候はば、明七日

にても宣御座候。此方にては幾日にも差支不

申候間、貴所様御方御都合次第參上可仕候。

何分乍御面倒貴報被仰知可被下候奉頼候。此

段可得貴意如此御座候。以上。

伊能勘解由様

野元嘉三次

八月六日

御手紙致拝見候。如仰秋冷相催候得共、弥

御安全被成御勤仕、珍重御儀奉存候。然者、

下拙在宿の日限被仰聞致承知候。出立程繁事

にも相成候間、明後八日に御光駕被下度奉存

御安全被成御勤仕珍重奉存候。然者、先達布
御内々承知仕候通り、弥益後には相成出立候
筈に御座候哉。於其儀、御面倒奉存候得共、
明後十日、十一日の間に致伺公。猶又、御内々
御縁合等の儀、彼是承知仕度候。

尤、今以御勘定方より何の御沙汰も無御座
候間被相延候方にも可有御座哉。旁以承知仕
度、此等の段得貴意候。御六カ敷ながら否披
仰知可被下候。以上。

七月八日

御手紙致啓上候。残暑甚敷御座候得共、弥

御内々承知仕候得共、御内々

御縁合等の儀、彼是承知仕度候。

尤、今以御勘定方より何の御沙汰も無御座

候間被相延候方にも可有御座哉。旁以承知仕

度、此等の段得貴意候。御六カ敷ながら否披

仰知可被下候。以上。

猶以、十日、十一日の内、若御差支も候は
ば御閑暇の節參上可仕候間、何分其節に被仰
下候様奉願候。若又、来月にも相成候はば益
後御都合の節參上可仕候。此段も御頼申上候。

野元嘉三次

七月一〇日 朝より曇天。小雨。午後より晴天。朝文助
在所へ行く。

七月一二日 朝より晴天。和州計頼町山添善五郎書状、
本所弥勒寺中宝珠院より曆局へ相届。それ
より同日に届く。

七月一九日 晴天。午後より曇。午後桑原へ行く。

七月二三日 晴天。午後より曇。午後桑原へ行く。

七月二十四日 晴天。八ツ頃桑原養好来る。

七月二十五日 朝より晴天。此日地図が上る。下役中惣て
行く。

七月二八日 朝より晴る。此夜坂部来る。

七月二九日 朝霧。微雨。或晴る。桑原へ地
図持參。

伊能勘解由様

野元嘉三次

八月六日

御手紙致拝見候。如仰残暑の節、弥、御安
全被成御勤仕奉賀候。然者、先達而者御入來
被下候処、早々之仕合奉存候。其節御談申候
通り、益後にも出立に可相成哉に思召、御問
合の趣致承知候。地図仕立方、未出来兼候間、
当月は先延引に相成、八月中出立にも相成可
申奉存候。右に付御光來被下候儀者、益後に
朝より晴る。午後高橋氏、渋川氏、大槻玄
沢(注29)来る。大川治兵衛着。

伊能勘解由様

野元嘉三次

七月三〇日

御手紙致拝見候。如仰秋冷相催候得共、弥

御安全被成御勤仕、珍重御儀奉存候。然者、

下拙在宿の日限被仰聞致承知候。出立程繁事

にも相成候間、明後八日に御光駕被下度奉存

以上。

候。猶拝顔可得貴意候。以上。

八月六日

伊能勘解由

野元嘉三次様

八月七日

伊能勘解由

稻葉伊予守様御内

門人 梁田栄藏
上田文助

八月二日

朝より雨。根来喜内殿より渋江新之助へ行
き帰る。此日三郎右衛門来る。

八月七日

八月八日

私儀、國々測量為御用、来る二七日出立仕
候。依え、此段御届申上候。以上。

已八月
渋江氏で岡本に出会う。出立前の差出し
下書を渡す。

朝雲天。農後臼杵稻葉伊予守内平生左助よ
り内弟子へ書状来る。
以手紙致啓上候。秋暑未迄兼御得共、弥、
御安閑被成御起居珍重奉存候。然者、勘解由
様御事先般被成候帰府、又々当年の内御当地
乍出立西国筋御測量被成候由承知仕候。何頃
の御出立に相成可申哉。

且又、伊予守在所農後國臼杵へは何頃何國
より御順邑被成候哉。御様致承知度奉存候。
猶々其内御參上申上候得共、先此段御内分
御問合申上度、如此御座候。以上。

八月七日
稻葉伊予内 平生左助

伊能勘解由様
御用内用
御弟子中様

八月一一日

朝雲天。小雨中雨。淺草目鏡師より暦局へ立
寄る。

八月一三日

朝雲天。四ツ頃より終日雨。夜も同じ。佐
右衛門来る。

八月一六日

朝より晴天。此朝様原佐右衛門出立。

朝晴天。午後林家へ行く。御用中に付対顔
なし。

八月二〇日

晴天。午後浅草へ行く。此日坂部願相済み。
市野金助、足立左内も被仰付昇遣。此日二
七日出立に相成る。

御手紙致拝見候。御清秋暑に御座候得者、
弥、御平安被成相勧仕珍重奉存候。然者、勘
解由儀、当年西国測量出立日限、且御領分農
後國臼杵へ被成候月頃内に御問合被下致承知
候。出立日限の儀は未程と相極り不申候得共、
当月末頃来月始めに相成可申候。尤、中山道
木曾路等測量も御座候間、御領國は大凡当冬
より来春の内と奉存候。右御趣如此御座候。
以上。

私儀、國々測量為御用、来る二七日出立仕
候。依え、此段御届申上候。以上。

伊能勘解由

渋江氏で岡本に出会う。出立前の差出し
下書を渡す。

八月二二日 朝より雨。終日降る。

私儀、去る子年九月中、不存寄、結構被召
出冥加の程難有仕合奉存候。然る所、此度九
州筋測量為御用罷越候様被仰付、首尾能御暇
難有仕合奉存候。

且、右御用中万一異変の儀も難斗奉得に付、
仮養子可奉願置候得共、一体私内存之儀者、
実子惣領伊能二郎右衛門も卒にても有之候は
ば、仮養子可奉願儀に御座候得共、男子等も
無御座、弟子共の内にも略式可奉願置相応の
者も無御座候。誠に以私儀者、
厚恩候儀難有仕合奉存候可相成儀に御座候は
ば、萬一御用先異変の儀も御座候はば、私へ
被下置候御扶持方、二郎右衛門へ被下置、
是迄仕来候帶刀、是又代々御免被下候はば、
生々世々冥加の程難有仕合奉存候。

右私儀、兼而心願に御座候間、可相成義に
御座候はば、右の通り被仰付に下置候様、内々
偏に奉願上候。以上。

文化六巳年八月 伊能勘解由 両判

渋江新之助殿

添書付半切

私儀、去る丑年一月中、佐藤修理殿御組の
筋、西国筋測量為御用出立仕候節、若御用先
にて異変の儀も御座候節は、私へ被下置候御
扶持方、実子惣領伊能三郎右衛門へ被下置候
様仕度段奉願置候に付、猶亦、此度出立仕候

間、別紙御書付右の段奉願候。以上。
巳八月 伊能勘解由 印

半切 覚 御弓矢鑓奉行 正木直吉組
當時天文方高橋作左衛門手付

中嶋長三郎

私儀、今度九州筋測量御用被仰付被越に付、
留守中、月々御扶持方請取の儀、其外共引請
世話致眞候様、右長三郎へ相頼申候、依之、
此段書付を以申上候。以上。

巳八月 伊能勘解由 印

野々山小右衛門殿
岡村半平 殿

日向半切

覚

御組伊能勘解由儀、今度九州筋測量為御
用、被越候付、留守中月々御扶持方、其外共
引請御世話致眞候様頼候方書付を以、御届け

申上候に付、右間合被仰聞御段致承知候。為
念此段書付を以、及御挨拶候。以上。

巳八月

中嶋長三郎 印

野々山小右衛門殿
岡村半平 殿

日向半切

り桑原隆朝、堀田攝津守殿、津田壯之助殿、
渋江新之助殿、岡村半平（大、市野金助へ
立寄る）へ行く。野々山小右衛門、小沢権
右衛門、（岡村札に付不參）。それより
渋川助左衛門殿へ立寄り暮に帰る。此夜御
金渡る。坂部送り来る。

八月二五日

朝より曇天。会田算左衛門来る。午後より
根来喜内殿出立届に行く。田口弥三郎来る。

夜に入りて帰る。

八月二六日

朝曇。六ツ半頃より小雨。午後に秋山内記
殿へ行く。それより暦局へ行き御証文請取
る。先触を南伝馬町へ遣す。暮に帰る。

八月二七日

伊能測量隊、九州並びに中国・中部内陸部
測量のため江戸出立。

文政三年十月二三日、林大学頭に「忠誨（タ
ダノリ）」「忠礼（ノリ）」「忠器（カタ）」の三
つの名を差出し、そのなかから「忠誨」を選

注釈

26 伊能三治郎（一八〇六～一八一七）

伊能三治郎は、忠敬の長男景敬と妻リテの
長男で、文化三年出生。幼名を三治郎、名を
忠誨という。

実名の忠誨は、「伊能忠誨日記」によれば、
文政三年十月二三日、林大学頭に「忠誨（タ
ダノリ）」「忠礼（ノリ）」「忠器（カタ）」の三
つの名を差出し、そのなかから「忠誨」を選

八月二三日 朝より大雨。浅草坂部へ右の本
紙を遣す。即ち、市野に相頼み岡村半平へ
届候都合。午後より林家へ行く。暮に帰る。
終日終夜雨。

八月二十四日

晴曇。朝、稻葉伊予守使者留守居平生左助
来る。豊後国白杵高五万六十石余。昼頃よ

んで貰つたと記されている。

忠敬が、非常にかわいがり、将来祖父の後をついで天文曆学の道に進むことを楽しみにしていたが、文政一〇年二月二二日、二三才で没する。法名は「修学院麗采成徳居士」という。

27 渡辺清蔵・渡辺忠蔵・加藤忠司・大久保竜太郎

渡辺清蔵は、佐原村を采地（サイチ）としていた津田氏の家老である。渡辺忠蔵、加藤忠司、大久保竜太郎は、津田氏の家士で、知行地の実務にあたつていた。

28 布留川弥作

布留川家は、上総国山辺郡片貝村（現十九里町片貝）にある。

忠敬は、宝暦一三年に布留川弥右衛門の子で、飯高惣兵衛の甥である盛右衛門を養子に迎える。盛右衛門八才のときである。

忠敬の長女イネは、盛右衛門と恋仲となり、江戸で同棲し、勘当される。寛政八年、盛右衛門、イネ夫婦は、盛右衛門の出生地の片貝で米穀商を開いたが、文化七年四月十三日に盛右衛門景明が五五才で没したので、イネは剃髪して「妙薰」と改め、佐原へ帰つてくる。

29 大槻玄沢（一七五七～一八二七）

大槻玄沢は、名を茂質（シゲタカ）、字を子

煥（シカン）、号を盤水といつた。

一関藩医の子として生まれ、一二才のとき、江戸に出て杉田玄白に医学を、前野良沢に蘭学を学んだ。江戸詰の仙台藩医のかたわら幕府天文台に仕事した。忠敬とは朋友であった。

30 第六次（四国・大和路）測量隊

伊能勘解由 六四才、六五才。

下役

坂部貞兵衛（惟道） 三八才、三九才。
柴山伝左衛門（正弼）

下河辺政五郎（与方）

青木勝次郎（勝雄）

弟子

稻生秀藏（敬慎） 一三才、一四才。

植田文助

宰領 久保木佐右衛門

棹取 久保木佐助

善人

供侍

藤吉、文吉、兵助、惣助、文藏。

神保庄作

三、第七次測量を終つて江戸帰着の日

から第八次測量出立の日まで

文化八年（一八一一）五月八日

朝雲。四ツ後より晴天雲。六ツ後下高井戸宿出立。一同一手にて測る（中略）。四ツ頃内藤新宿着。休む。涼野屋長七。それより一同出立。それぞれ家々へ帰る。八ツ頃着。七ツ頃より雨。加納屋治兵衛、伊能道喜（注31）、妙薰、三治郎当所迄、中途迄お琴（コト）、鉄之助（注32）出る。

五月九日

前夜より雨。五ツ頃麻上下にて浅草高橋御役所、吉田役所、それより御成小路組頭渋江新之助、小川街神保小路支配松平石見守、津田屋敷渡辺清蔵、渡辺忠蔵へ立寄る。七ツ前に帰宿。

五月一日

朝雲。桑原隆朝、それより堀田侯、浅川助左衛門殿へ行く。八ツ頃帰着。

五月一三日

朝雲。お琴帰る。野元嘉三へ贈物を贈る。

五月一四日

六ツ半頃支配松平石見守殿へ相対顔に行く。

世話役野々山小右衛門、それより渋江新右衛門へ行く。近藤重蔵は立寄る。留守。五月一六日

六ツ後浅草高橋氏へ行き国産物持參。坂部家。

五月一七日

此日地図を初む。坂部、下河辺、青木、永

井来る。

助来る。

寄る。夜に入て帰る。

五月一八日 野元嘉三次来る。

六月二二日 坂部登城、御半紙一しめ、墨三丁、沿海地図箱来る。

七月晦日 秀藏手伝う。

五月一九日 午前間宮林藏（注33）午後加藤正作来る。

六月二三日 伊能七左衛門来る。文助帰る。

八月五日 源空寺廟参る。それより高橋御役所へ立寄る。近藤重藏に会う。美の屋夫より会田へ立寄る。秀藏手伝う。

五月二四日 佐原伊能主人、三治郎、七左衛門、伝七帰国。近藤重藏来る。

六月二六日 高橋氏に振舞あり行き夜帰る。

八月六日 栄藏来る。渡川へ行く。御同朋佐藤春貞に会う。

五月二五日 坂部貞兵衛、九州並びに石見、長門の諸侯へ礼に廻る。

六月二六日 坂部同断。

八月八日 渡辺清藏来る。秀藏来て直に帰る。

五月二六日 坂部同断。

六月二七日 坂部礼廻る。

八月一〇日 我等白木屋より小石川三百坂、荒井平兵衛へ行く。夫より岡村半平、市野金助へ立寄る。夜帰る。

六月二一日 坂部御扶持代金持参。間宮林藏来る。

六月二二日 坂部御成へ行く。ドウサ美濃十五帖持来る。

八月一六日 栄藏来る。

六月五日 六ツ後所々土用見舞へ出る。秋山内記、浅草磨局三軒、御成小路渋谷新之助、支配石見守、大手堀田攝津守殿、間宮林藏、山田綱治郎等へ行き九ツ頃帰宿。

六月六日 堀田仁助養子堀田信輔来る。

九月三日 渋川助左衛門来る。

六月七日 青木、間宮林藏来る。渡辺清藏大勢と連れ来る。

九月一四日 夜間宮林藏来る。

六月一二日 文助、在所へ行く。

九月一五日 晴天。神田祭礼。

（欄外） 五月二五日より我等、坂部両名、名札にて九州、その外石州、備中の諸侯へ国産を以て贈り下され候御礼に廻る（二五名の江戸藩主邸）。

九月二二日 我等浅草へ行く。

六月一四日 村上嶋之允（注34）倅村上貞

七月一七日 梁田栄藏出立。牛込へ行く。下河辺出勤。

九月二三日 小林源吾、加納屋とし来る。

七月二四日 昼後栄藏来る。

九月二七日 松平越中守内浅井司来る。

七月二五日 松野茂右衛門、山鹿恒三郎へ行く。夫より成嶋仙藏へ行く。司天台高橋へ

十月朔日 夜間宮来る。

十月二日 門谷清治来る。桜井秀藏来る。
 十月九日 浅草坂部三分一里岡一枚持參。
 十月一〇日 伝七来る。一二日帰国。
 十月一二日 松平豊後守内留守居添役武松正
 藏来る。野元嘉三次代役平田治郎八の事を
 いう。平田は夜中薩州へ下向。会田氏来る。
 十月一五日 此夜 久保木来る。
 十月二七日 薩州武松正藏来る。
 十月三日 我等浅草へ行く。太田才助、近
 藤重藏へ立寄る。
 十月六日 荒井平兵衛、高橋子来る。
 十月七日 浅草へ行く。浅江長伯、近藤重藏、大槻玄
 沢、杉田伯元、歌川玄真、益城良輔と出会
 う。大番石川七左衛門。
 十月九日 近藤重藏来る。
 十月一四日 此日松平石見守殿へ相対に行
 く。地図持參。野々山小右衛門、滝屋幸助
 出会う。共々組頭。浅江新之助へ罷越出立
 の儀申談。心願書を渡し、跡引請青木勝次
 郎に相頼む。それより浅草へ立寄る。青木
 へ相談済、大槻玄沢に逢う。
 十月一五日 高橋より地図上納。牧野豊前守内合田祐唯、
 高橋幸助入門。下河辺へ引合わす。
 十月一七日 三州藤川宿称名寺、即法藏寺
 役寺、同山中八幡宮神主・竹尾但馬来る。
 十月一八日 御金渡る。
 十月一九日 我等、買物に出る。

注釈

十一月一〇日 細川留主居より書状。
 十一月一二日 五ツ頃止宿出立。桑原隆朝、桜井八十右衛
 門、渋川助左衛門、林大学頭殿、細川越中
 守殿留守居落合仙助、堀田攝津守殿、並び
 に山田綱治郎、津田屋敷、組頭浅江新之助
 へ立寄る。二十五日出立届書二通相渡す。
 届日限早過候に付、二十四日浅江より書直
 し支配へ出す等。高橋三平殿、それより支
 配松平石見守殿へ届。暮合に帰宅。
 十一月二二日 此日会田算左衛門へ行く。津軽山鹿恒五郎、
 松野茂右衛門へ立寄り午前に帰家。竹屋但
 馬称名寺入門。此朝山田綱治郎、朝後武松
 正藏来る。
 十一月二三日 桜井八十右衛門、下河辺、堀田信輔、近藤
 重藏、坂部夜に来る。
 十一月二四日 四ツ後近藤重藏、秋山内記、太田才助へ立
 寄る。司天台へ行く。それより吉田、山路
 へ寄る。御証文頂戴。即ち写し先触を出す。

34 村上嶋之允（一七六〇～一八〇八）
 村上嶋之允は、宝曆一〇年に伊勢で生まれ
 る。寛政一〇年蝦夷地に渡り、寛政一二年六
 月朔日に蝦夷の「市ノ渡」の自宅で伊能忠敬
 と初めて会う。村上貞助は、備中の人が、村
 上嶋之允の養子になり、林藏を助けて「東鞆
 地方紀行」「北夷分界余話」などの編纂をする。

31 伊能道喜
 伊能道喜は、佐原村下宿（現佐原市下宿）
 に住んでいた伊能平右衛門の号である。
 32 伊能鉄之助
 伊能鉄之助は、忠敬の長男景敬と妻リテの
 一男。文政元年一月二十五日九才で没。
 33 間宮林藏（一七八〇～一八四四）
 間宮林藏は、安永九年に常陸国筑波郡谷井
 田村上平柳（現伊奈町上平柳）で、間宮庄兵
 衛とクマの子として生まれた。名は倫宗（ト
 モムネ）通称を林藏といった。
 文化八年五月一九日から一週間程、江戸の
 忠敬宅を訪問し、測量術を学び、文化一〇年
 から一二年にかけて忠敬の未測量の蝦夷地を
 測量して、その資料を文化一四年一〇月一三
 日に忠敬宅に持參する。
 天保一五年一月二六日、江戸本所外手町で
 六五才で没す。林藏の出生年と死亡地は、そ
 れぞれ二説がある。

伊能測量隊坂部組大隅半島基底部測量（文化七年）

佐々木 紹洋

一、第七次測量（九州第一次）と大隅半島基底部測量

大隅半島基底部とは、伊能測量隊坂部組が、前年八月二七日に江戸を出発した第七次測量のなかで、文化七年（一八一〇）に測量をおこなった油津海岸（宮崎県日南市）から鹿児島県福山町の錦江湾岸までの十八里三十町余り（本隊が測量した油津海岸から飫肥城下本町までの二里六町八間を含む）をいう。

坂部組がおこなった大隅半島基底部測量は、幅十八里三十町余りもある大隅半島の基底部を横切つて測量する大横切り測量であつたが、實際には二回に分けて、文化七年（一八一〇）の四月と六月に、東は飫肥（日南市）側から、西は廻村（鹿児島県福山町）・都城側からと、別々に行なわれ、標高九百mを越える牛之峠（南那珂山地）の山頂で繋いでいる。

この山地測量の測量コースは、薩摩領の巡見を終えた幕府巡見使一行が牛之峠を越えて隣藩の伊東氏領の巡見に移る際に通行する都城・飫肥往還とほぼ同じである。ただ違うのは、巡見使一行は牛之峠西麓の寺柱村（宮崎県三股町宮村）から東麓の一之瀬（日南市新村）へと牛之峠を越えているのに対し、東西から測量を進め、牛之峠山頂で繋いでいることである。

二、油津（日南市）より牛之峠山頂までの測量（日南市域の測量）

文化七年四月二七日、伊能測量隊（本隊）は、油津海岸の飫肥城下

上り口から飫肥城下本町まで二里六町八間を測り、飫肥城主伊東修理太夫（二九代飫肥藩主伊東祐民）が準備した客家（仮亭主小村善右衛門）に止宿している。

翌、二八日朝六ツ半（七時）頃、伊能測量隊別手の坂部組（隊長の坂部貞兵衛・下役永井甚右衛門・同箱田良助・同梁田栄藏・下僕長藏）は、本隊とは別れて、飫肥城下の客家を出立した。

この測量は、四月二九日から翌、晦日（三十日）の正午まで、二日半日の日数をかけて牛之峠頂上まで測つてある。『測量日記』には、「飫肥城下より大隅街道、牛ノ峠まで手分測」とある。

二八日は飫肥城下を出立し、楠原村西川（酒谷川）を渡り、同字走込、同字栗岸、酒谷本村、同村字長野山中まで二里四一間を測つた。四ツ半（午後十一時）頃、酒谷村に引き帰り、庄屋儀兵衛宅に止宿。

翌、二九日朝六ツ（六時）頃、酒谷村出立、同字長野より初め、同字秋山・権現鶴、同字陣尾・深瀬、同字白木俣・地吉、山小屋二三軒、牛之峠上り口、同字山ノ神まで三里十二町二三間を測つた。八ツ半（午後三時）頃に測量が済み、白木俣に引返し、七ツ半（午後五時）過ぎ頃に多治兵衛宅に止宿。

翌、晦日（三十日）朝六ツ（六時）白木俣出立、牛峠（牛之峠）山ノ神より初め、牛之峠山頂まで一里四町四五間を測り、測印を残した。小休のあと、酒谷村に引き返し、七ツ（午後四時）頃、多治兵衛宅に止宿。なお、飫肥城下から牛峠山頂までの六里十七町四九間の測量を終えた坂部組は翌、五月朔日（一日）の朝七ツ半（五時）頃、酒谷村を出立し、飫肥城下へは夜明けに到着している。

油津から牛之峠山頂までの八里二三町余りには、伊能測量隊の本隊が、四月二七日に測量した油津から飫肥城下までの二里六町八間が含まれている。

三、廻村（鹿児島県福山町）より牛之峠嶺頂まで（都城経由）の測量

文化七年六月十六日、伊能測量隊別手坂部組（坂部・永井・梁田・箱田・下僕平助）は、新城村（鹿児島県垂水市の大字）を船で出発し、廻村に着いた。

同十七日朝六ツ（六時）後、坂部組は、廻村より、日向街道（高岡往還）にそつて測量を初め、廻村字馬立坂、佳例川村、同字外本野、福山野牧、同字柴立、上野村、藏町村、同字荒神山、鶴木村、上野村の枝通り山村まで三里十八町五十間を測る。止宿は通り山村の百姓市郎兵衛宅。

同十八日朝、通り山村より初め、鶴木村字小倉、同万蔵堂（ここまで大隅国）、日向諸県郡五十町分村、同字見帰、同元服、同高野、五十町村、同竹ノ下、竹の下川（板橋三七間）、宮丸村、宇都ノ城（遠近宮丸村を都城という）、後町、三重町字井藏田（ここに本印を残す）、井藏田村（下長飯村のこと）家中町迄三里十七町五八間を測る。また、井印より本町、唐人町、前田迄測る。ここは薩州内分地、島津筑後（都城島津家二代島津久倫）在所。四ツ半（午後十一時）過ぎに本町（現、中央通りの上町）の西川（河）万右衛門宅に止宿。

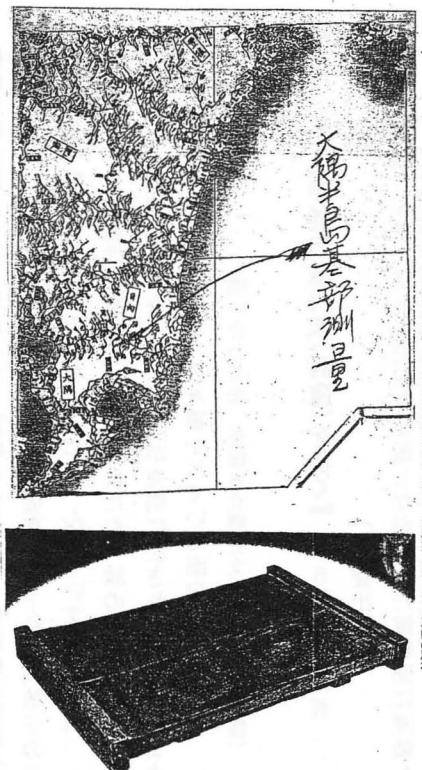
この西川万右衛門宅は、都城島津家の家老安山松巖が退隱後に著わしたとされる「年代実録」によると、寛政元年（一七八九）六月二五日に幕府巡見使が宿泊したほか、『筑紫日記』やこの彦九郎の日記によつた吉村昭氏の小説『彦九郎山河』では、高山彦九郎が寛政四年六月四日に都城を訪れ、西川万右衛門宅に宿泊している。

同十九日、前日に引き続き井藏田村家中町から初め、原口村、鷺巣村、寺柱村（薩摩藩の番所あり）、同中峠（中之峠茶屋がある）、牛之峠山頂まで三里五町二一間を測り、四月晦日飫肥領より牛之峠山頂までの測量の残印と繋いだ。廻村より牛之峠山頂までの里程は、十里六

町余りであり、大隅半島基底部（油津から廻村まで）の里程は、十八里三十町余りとなる。大隅半島基底部横切り測量はここで終了し、坂部組は本町西川万右衛門宅に帰宿している。

四、伊能小図にみる大隈半島基底部測量（朝日新聞平成十二年二月）

東大総合研究博物館所蔵の版本3枚のうちから、傷みの激しい日向国（宮崎県）周辺の一枚を日立製作所が最新のデジタル技術で、再現した伊能小図に、大隈半島基底部測量の側線をはつきり見ることができる。また、その南に大隈半島の最狭部分を鹿屋経由で横切り測量した測線も見える。



参考資料・文献

- ◎『伊能忠敬測量日記』佐久間達夫校訂（大空社）第三卷
- ◎鹿児島県史料集十『伊能忠敬の鹿児島関係測量資料並に解説』
- ◎渡辺一郎著『幕府天文方御用伊能測量隊罷通る』（NTT出版）

史料案内

渡部健三著『伊能測量隊、東日本をゆく』

編集部

四六判三七八頁・定価一八〇〇円十税

会員の渡部さん（盛岡在住）がお書きになった本である。東日本を中心的に、伊能忠敬の生い立ちから、伊能測量の全貌を分かりやすい文章でつづっている。曆学や天文の豆知識もついていて便利である。注文は地方・小出版流通センタ扱い。（一〇〇一年三月三〇日発行）
(出版社 無明舎出版 秋田市広面字川崎一一一〇一 Fax 018-832-5137)

伊藤一男著『新考 伊能忠敬』四六判一〇〇頁・定価一〇〇〇円十税

忠敬の佐原入婿以前の九十九里、小堤時代のことは、分からぬ」とが多いが、地元の史料から断片的な事実を克明にひろいあげている。千葉日報に連載された記事を整理したもの。伊藤氏は、郷土史家で、横芝町の文化財審議会長。（一〇〇〇年一〇月一〇日発行）
(出版社 嵐書房出版 流山市流山2-296-5 Fax 0471-58-2316)

安永純子著『伊能測量隊員旅中日記（上）』A4版五四頁『愛媛県立

歴史文化博物館 研究紀要 第六号一〇〇一年三月 収載』

四国測量に従事した下役・柴山伝左衛門の測量中の日記を解説したもの。同日記は小田原の古書店から売りに出ているのを、朝日新聞の堀田記者（会員）と安藤由紀子さんの合同調査で見せてもらい、朝日新聞の全国版第一社会面で紹介された史料である。

NHK大阪放送局の調査で、松山にあることがわかつたので早速問い合わせたら、入札で入手したことである。縦一六・九センチ、

横一一・〇センチ、厚さ一・二センチの袋とじ一冊の横帳で、四折り半紙に毛筆で書かれている。一巻は一六二丁、二巻は一六〇丁からなる。一巻には標題がないが、一巻の表紙には、中央に「旅中日記 第二」、右上に文化五戌年とある。

伊能忠敬の測量日記と対比して、安藤さんが下役・柴山伝左衛門の日記と判断したものである。伊能測量に従事した下役、内弟子の日記でこれまで公表されたものではなく、たいへん珍しい文書である。

このたび、一巻だけが解説され発表されたが、旅の記録として、宿舎、見聞記、参拝した社寺、名所などが克明に記されている。いままで知られていなかつたことが、色々書かれていて面白い。

（問い合わせ先 愛媛県立歴史文化博物館 学芸課）

横川淳一郎著『伊能忠敬丹波（兵庫）を歩く』 A5版一〇九頁

（自費出版）

会員の横川さんが、地元の史料を発掘しながら、丹波新聞に連載した記事をまとめたもの。横川さんは鳥瞰図を描くの得意としているが、忠敬が歩いた丹波路を何枚かの鳥瞰図で紹介している。（一〇〇一年四月発行。）希望の方は横川さんへ直接。（電話 0796-72-0946）

磯部欣三著『幕末明治の佐渡日記』A5版二九〇頁 定価四〇〇〇円

幕末に佐渡を訪れた五人の有名人の佐渡における記録を調べ、人物に触れている。伊能忠敬、川路聖謨、松浦武四郎、吉田松陰、松森胤保が登場する。筆者の本名は本間寅雄。元毎日新聞記者。相川町史史編纂委員。著書に中公新書『佐渡金山』などがある。（一〇〇〇年一二月発行。）

（出版社 恒文社

東京都千代田区三崎町三の一〇六一〇）

新湊市博物館編『越中の偉人石黒信由』改訂版 A5版一五六頁

昭和六〇年発行の初版の改訂版。伊能忠敬との出会い、信由の業績、測量術などを述べる。彼の測量実務、地図制作法などが分り易く記されており、忠敬より少し後であるが、同時代の測量法の理解に役立つ。

（問い合わせ先 富山県新湊市 新湊市博物館）

河崎倫代著『越中城端の人天文暦学者 西村太沖伝』A5版六〇頁

金沢在住の会員・河崎さんの西村太沖伝です。城端神明社内の西村先生顕彰碑の修復記念として企画された伝記です。六〇頁のなかに写真・図版五九枚を収載する分りやすい太沖伝。題字は城端町長の岩田忠正さん。発行は、西村太沖記念碑協賛会・城端市教育委員会。

（問い合わせ先 城端市教育委員会）

木全敬藏著『江戸初期の紅毛流測量術』『地図』第三六巻第四号一九九八年一二月発行。

江戸初期の測量術についての日本国際地図学会誌への報告である。巻末に参考文献が列挙されている。（発行 日本地図センタ 研究第二部）

高木崇世芝著『北海道の古地図』B5版カラーリーフレット一八〇〇円
二〇〇〇年七月から八月にかけて函館市立博物館で開催された「古地図にみる北海道」展の図録をかねて出版された北方図集である。会員・高木氏は北方図の研究では著名な方で、伊能図にも詳しく述べ、東京都立中央図書館の伊能小図は同氏の発掘である。函館市博の展示は大部分を高木氏の地図で開かれたというから、たゞことではない。

（出版社 五稜郭タワー テレホン・010-0001 函館市五稜郭町四三一九）

伊能ウオーケ番外シリーズが始まる

平成の伊能ウオーケは本年元旦に無事ゴールをしたが、各方面から「伊能ウオーケの火は消さないで」という継続の要望があり、毎年一回開催されることになった。日本ウオーキング協会、伊能忠敬研究会などが主催し、伊能ウオーケでは行けなかつた全国各地を歩こうといふ催しで「番外シリーズ」と名づけられた。

今年は第一回として伊豆半島で開かれた。四月二一日に熱海を出発し、東海岸を南下して下田へ。石廊崎から西海岸を北上、十日の沼津まで海岸線をグルリと一周した。本部隊長だった大内さんをはじめ、伊能ウオーケでおなじみの顔に新しい顔を合せ約百名が参加した。全日晴天に恵まれ、桜、菜の花、すみれ、たんぽぽが満開、夏みかんがたくさんの中を歩いた。伊豆早春フラワーウオーキングとして、到着・出立の各市町村で盛大な歓迎を受けた。研究会からは中山さんが全コースを、途中では伊能陽子さん、福田、新沢さんたちが参加した。「なまこ壁と桜」の松崎では「春風の香につつまれた文明開化の町を歩く」をテーマに全国から二千人が集まつた。会場の松崎小学校で渡辺代表が一行を激励。約二百年前の第二次、第九次の伊能測量の意義と、沿道の近くに残存する当時の宿泊先など紹介された。

第二回は来春一月十八日から二十五日まで、本号で佐々木さんの地域資料にある鹿児島は大隅半島で開催される。
その後には北海道襟裳・根室、能登半島、予讃の道、三陸海岸、下北半島、壱岐・対馬などが予定されている。どこかでご一諸しませんか。

（福田 弘行）

新・伊能忠敬物語（二）

渡辺一郎

忠敬の生い立ち

がう、と言つていただけだとありがたい。伏して声援をお願いします。

執筆にあつたつて

伊能忠敬研究会が一定の役割を果たしてきた今回の伊能ブームをきっかけとして、忠敬についての多数の著書や記事・映像が世の中に送り出されました。たいへん良いことだとおもう。

地道な調査研究にもとづいた報告もたくさん世に出てきたが、付け焼刃の二番煎じで、それに自分の思いだけで「尾ひれ」をつけ、あたかも真実であるかのように描いた文章も多い。

伊能忠敬の名前が広まるという意味では悪くはないが、これまでにもあつた忠敬の虚像部分が、さらに増幅されるという点では望ましくない。

幸いなことに、本会には会員諸兄姉の真摯な研究成果がある。これらを活用させていただき、多少は推測もいれて、「新・伊能忠敬物語」

として、できる限り事実に近い形で伊能忠敬像を描いてみないとおもう。これまでの会員の皆様の発表内容を利用させていただくことにあるためて御了解を賜りたい。

大しごとであるが、他に期待していても、そういう作家は現れそうもないで、挑戦したいと思う。どこまでいけるか分からぬが、会員各位の御叱正を賜りたい。違つてゐるところがあつたら、そこはち

小関村に出生 伊能忠敬は延享二年（一七四五）一月一日、上総国九十九里浜のほぼ中央の小関（こぜき）村で、小関五郎左衛門家の貞恒とミネの第三子として生まれた。幼名は三治郎、兄・貞詮（8才）、姉・房（5才）に続く次男であつた。

九十九里浜は南の太東（たいとう）岬から北の刑部（ぎょうぶ）岬まで約五〇キロの円弧状の砂浜である。どうじは、暖流の黒潮と寒流の親潮の接点にあたつていたため、いわし、あじ、さば、など大量の魚類が接岸し、一六世紀の半ばから地引網漁業が盛んであつた。

一八世紀の初頭に、漁船と漁具の画期的な改良がおこなわれ、「大地曳（おおじびき）」という漁法が確立すると、「いわし漁」の漁獲高が飛躍的に増加した。鰯の脂を絞つたあと乾燥したものを干鰯（ほしか）というが、九十九里浜では大量の干鰯が生産されるようになる。文化年間には平常の年で、年に一二〇万俵も生産された。江戸、大阪の市場を通じて東国の大花・煙草・葡萄など商品作物の生産地、関西の藍・木綿農家などに高級肥料として大量に出荷され、魚肥生産地として有名になる。

佐藤季信は著書のなかで「九十九里浜では年々およそ三〇万金の鰯を漁し、海浜はすこぶる豊かである。網数は二〇〇余張りで、大網主は、栗生村（九十九里町）の惣兵衛網、不動村（同）の角兵衛網、屋形村（横芝町）の惣兵衛網、北高根村（白子町）の市郎左衛門網、飯沼村（銚子市）の柳仁平治網の五軒である」と述べたという。

豊かな経済的背景が想像されるが、五大網主のうち、栗生村の惣兵

衛網は飯高家の經營で、後年忠敬の畏友となつた飯高惣兵衛が当主として創業したものである。屋形村の惣兵衛網は海保家の經營で、忠敬の父の親類筋である。經濟の充実と、千鰯の出荷などを通じた商売上の交流から、江戸の文化人の來遊が歓迎されて、和算・文学・和歌・俳諧など学問や藝術が伝えられ、文化水準の高い地域となつていた。

小関村は江戸時代を通じて北町奉行組与力の給地で、村高は二二〇石あるいは二〇〇石であった。

江戸の町奉行与力は、南と北の各組五〇騎で、知行はひとり二〇〇石であつて、それぞれ一万石を一筆の給地としてうけていた。地元には給



小関、小堤と佐原の
位置関係

地の村々をまとめて差配する村役人が定められ、代官として年貢の徵収にあたつた。町与力は付け届けが多く内福であつたから、給地から無理な年貢の取り立てを必要としないので、地元代官は全てをまかされていたろう。前記の飯高惣兵衛や、忠敬の長男・景敬の嫁リテの父・小川新兵衛はこのような代官職も勤めていた。

小関村はそういう村々の一つである。五六才のとき忠敬は房総沿岸の測量をしながら小関村を通過しているが、測量日記には家数一三〇軒と記している小さな村だった。海岸には枝村の小関納屋があつた。納屋は本来、漁業のシーズン中寝泊りする作業小屋であるが、次第に納屋を本拠として生活する者もあらわれる。

忠敬の生家・小関家はその小関村の名主（一七七二年（明和九）の文書等）であつたが、現在では菩提寺の妙覺寺に墓碑一つを残すのみで跡が絶えている。墓碑解説によれば小関五郎左衛門家は、東金城主酒井氏に仕えた刑部少輔信量の後裔であるといふ。

いっぽう、これまでよくいわれてきた網元でもあつたという説についてはまだ確認ができていない。小関村の網主は、一七七五年（安永四）の記録では利兵衛、長左衛門、兵吉、権左衛門の四名であり、一八一五年（文政二）の文書では六郎左衛門、左吉郎の二名（作田家史料）となつていて、五郎左衛門の名は出てこない。しかし、飯高家文書（安永四年）では栗生村の飯高惣兵衛と共に浜役人として登場する。

浜役人の意味はよく分からぬが、小関家はこの地区の草分け百姓の一人であるから、何らかの形で漁業に関与していたことは充分考えられる。

現在の小関地区は九十九里町（人口約二万人、一九五五年近隣の合併により町制を施行した）の一部となつてゐるが、町の北部、作田川下流の右岸に位置し、世帯数三百余りの集落である。小関家の屋敷があつた

場所に、一九三六年（昭和一）に伊能忠敬の出生地を記念するための碑が建てられ、碑面には徳富蘇峰の揮毫で「伊能忠敬出生之地」と刻まれた。

一九九六年（平成八）になつて、九十九里町の町制施行四〇周年、伊能忠敬生誕二五〇周年を機会に、前記の碑に隣接して伊能忠敬記念公園が設けられ、伊能忠敬の銅像も建立された。ただし、公園の位置は小関家の屋敷があつた場所ということであつて、屋敷跡が公園になつたのではない。（写真は、九十九里町の伊能忠敬記念公園に設けられた伊能忠敬銅像。象限儀を横に天を指している）



母の病没　満六歳（年令は現代と同じに満年令で表現すること、し、出生月不明の場合は、数え年から一年減じたものを満年令とした）になつたとき母「ミネ」が、はやり病で急死する。三治郎は驚いたろう。幼いここ

ろに環境の激変を実感する。

母の死没は一七五一（宝暦元）年で享年は不詳である。そうすると婿だつた父親の貞恒（四一歳）は三人の子がありながら離縁され、兄貞詮（一四歳）と姉房（一一歳）をつれて、約一五キロばかり北にある小堤村（現在は横芝町小堤）の実家・神保家へ帰る。六才の三治郎だけが小関家に残された。

このことについて明治の伝記作者・大谷亮吉が大著『伊能忠敬（大正六年 岩波書店 七六六頁）』において、

「宝暦元年、貞恒の配小関氏の没するや忠敬、年甫めて七歳、而して小関には配の実弟在るの故を以つて、貞恒は遂に其子女と共に神保家に復帰するの止むを得ざるに至りしが、忠敬は齡猶幼なるが故に小関氏に留まること数年、（中略）忠敬の小関家における遂に可憐の一寄生児たるに過ぎざるをもつて、当時の普通教育たる読書・習字・算術等も十分に学び得しや疑いなきあたわづ。あるいは伝う。忠敬は九十九里の浜頭に漁具を藏せる納屋の番人として多くその幼時を送れりと。（神保家その他に伝うる口碑）」

と書いたところから、このあと多数の著書は忠敬を語るとき、無批判に孫引きして漁具番説をとつてゐるものが多い。

反証がないこともあるが、悲惨な環境から這い上がつたといえ、偉人伝説にふさわしいこともあつて定説化している。もともとは、神保家と周辺に伝える口碑であるといつており、不明確な根拠による話である。大谷氏も泉下で苦笑しているだろう。

今、考へると何とも不思議な話である。貞恒は二五歳（推定）で婿入りし、四一歳まで働いて一四歳の長男があつたのに妻の死により離

縁されている。上総地方には「姉家督」という慣習があり、男女にかかわらず長子相続制であった。母は長子だったので婿として父・貞恒を貰つて三人の子をもうけていた。姉家督の場合、妻が亡くなれば婿は実家に帰るのがしきたりで、例はいくつもあると横芝町ではいわれている。

しかし、男の子は数え年一歳から一五歳になると「権祝い」をして一人前になると。本来なら家督は一四歳(数え年一五歳)の貞詮が繼いで、父が後見するというのが順序である。親族会議は紛糾しだろう。

「あとは貞詮に繼がせるのが筋だが、ミネにはまだ分家していらない弟がいる。これをどうする?」

「財産分けをして分家させられるか」

「無理だ。本家が成り立たない。自前で分家するのも無理だろう」

「わるいけど、貞恒に戻つてもらうしかあるまい。子供は連れていくよ。成人した子は宝だ。実家の神保家も名門。みなで働けばなんとかなるだろう」

「まとまつた金も少しだったそう」

「わかつた。実家と相談する。しかし、戻つて働くには幼い三治郎の面倒は見きれない。しばらく預かって読み・書き・ソロバンを、しつかり仕込んでもらえないか」

「いいとも。身を引いてくれるなら、確かに引き受けた。弟もひとり身で、跡とりがない。みどころがある三治郎をおいていっててくれるなら、こちらも好都合だ」

とこんな話して離縁がきまつたのだろう。三治郎は泣き出したが「かならず迎えにくるから、叔父さんのいうことを聞いて、しつかり勉強しろ」と言い残して小関家を出た。

貞恒とミネの夫婦仲はよかつた。実家に帰つてから遙か後年、隠居後の五八歳のとき、信州の善光寺に参つてミネの菩提を弔い、記念に高さ三五センチの阿弥陀如来坐像を求めている。仏像は、いまも後裔の神保理左衛門家(当主は神保弘之氏)に伝えられている。貞恒は実家には戻つたが、ミネのことは生涯忘れてはいなかつた。

忠敬漁具番説の疑問 そして、少年時代の九十九里浜漁具番説の疑問である。大谷は神保家周辺の口碑と伝えるが、現在も続いている神保本家(当主は神保誠氏)には、そのような話は伝わっていない。大谷氏の編著は帝国学士院(現在は日本学士院)の事業であつて官選に近い著述である。東京大学から、県、郡役所を経由して指示が出され、史



小関の妙覚寺にある小関五郎左衛門家の墓碑

料、口碑の採集調査が行われている。

どうせん、報告した内容は控えが残されてしかるべきものである。

神保家に記録がないということは、当時から忠敬偉人説につけられた尾ひれのような曖昧な話だったのだろう。筆者は伊能忠敬、幼名三治郎の漁具番説を信じない。

幼時に親を失っているのだから、幸せではない環境にあつたことは確かであるが、生家は豊かな経済基盤をもつ地域の富裕層の名主だった。家業の手伝いくらいはしたかも知れないが、どうじの基礎教養である読み・書き・ソロバンは、しっかりと勉強する機会が与えられていたに違いない。

忠敬青春の里・小堤（現横芝町小堤）

（おんずみ）

父のもとへ 三治郎が一〇歳になつたとき、父が迎えにきて、父のもとに引き取られる。父の実家・神保家の先祖は、すぐ近くの丘の上にあつた坂田城の宿老を勤めていた神保長門守（一五七三年没）である。

小田原落城後は帰農して名主となつていた。

寛政五年の小堤村は四一八石の旗本領で家数三七軒であつたが、神保家は村方耕地の約一六%を所有する地主であつた。近くに累代の墓碑も残つてゐる。

神保家敷は堀を廻らした豪壮な構えの名主屋敷だつたが、父はこのとき、やつと分家したばかりだつた。父が分家したのは、横芝町の文

化財審議会長の伊藤一男氏の推定では一七五八年（宝暦八）四八歳のときという。大谷氏の所説では一七六四年（明和元）五四歳である。大谷説だと忠敬が佐原に入婿二年後ということになる。父の立てた分家は屋号を「店（たな）」といい、屋号からみても財産分けではない自前の

分家だつた。貞恒は帰村のとき小関村との間で何等かの営業上の取り決めをしてきたことが考えられる。

忠敬が入婿のとき、いくら才能で選んだといつても、家も無いところから婿を迎えることは考えにくい。数年働いて分家という伊藤説の四八歳のほうが自然である。このころ、後妻も迎えている。妻も貢い、家も作るというほうが納まりがいい。

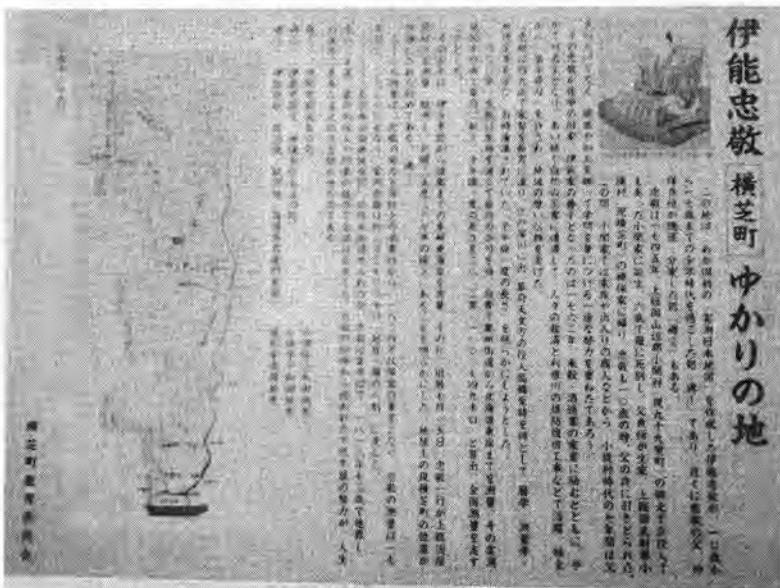
大谷亮吉は、明確な事績は全くわからないとしながらも、神保家の口碑によれば「三治郎がかえつたときすでに母がいて、安住の楽園ではなく、家にあること稀にして、常総地方の親戚・故旧の間を流浪す」としてゐる。九十九里浜の漁具番人説と同じ筆法である。これまでの多くの伝記は大谷説の焼き直しで忠敬流浪説をとつてゐる。

ここでも根拠は神保家の口碑である。伊藤一男氏の調査によると、神保家系譜では、貞恒が後妻を貰うのは一七五七年（宝暦七）四七歳のときで、忠敬が父のもとに帰つた二年後のことであるという。継母は武射郡板川村の戸川惣右衛門の娘であつた。忠敬を引き取り、妻を迎えて家を建てと、父は二人の兄姉と頑張つた。

後年、忠敬が測量旅行中に出した手紙の一節に「父の汗の結晶である我が家を手放すとは何事か」と憤つた文章がある。少年三治郎はしつかり父の働きをみていたのである。大谷が調査したころは資料も多く残つてゐたはずであるが、あいまいな口碑を採用したのは残念である。

一七才になつて佐原の伊能家に入婿するまでを父の指導のもとで過ごす。父に引き取られた直後、中台村の伊藤家に婿にきていた清三郎と知り合いこころを通じ合う。清三郎は栗生村の飯高惣右衛門の三男で一七三四年（享保十九）の生まれ。このとき二一歳だつた。

のちに兄二人の死亡により、夫婦で貰い返されて飯高家を継ぎ、惣兵衛を襲名し尚寛と名乗った。相続後、二十九歳のとき地引網に投資して成功し、九十九里浜屈指の網元に成長した。名主、江戸北町奉行与力の給地割元役、地方代官も勤めた。



忠敬は得難い畏友をえて交友は終生続いた。佐原入婿後、当面した牛頭天王社祭礼事件、河岸一件など試練の日々において、飯高惣兵衛の存在は大きな心の支えだった。忠敬の長女・稻穀養子盛右衛門との結婚を望んだ一件では、惣兵衛は佐原まで足を運んで四泊も得した。

上総、下総は経済活動の盛んな地域がら、実学としての和算も流行しており、各地に研究グループがあつて、いまでも神社や寺院に納められた算額が多く残っている。真龜村（九十九里町）の植杉是勝、山室村（松尾町）の竹内豊矩、牛熊村（横芝町）の鈴木英薰など、医師、儒者でありながら和算家を兼ねた者がおり、近隣の子弟に実用数学を教授していた。

青年三治郎が神保家に泊まつた幕府役人・森覚藏が計算をしているのを見てすぐ覚えた、というような言い伝えは、こういう環境のなかでは当然なことだったろう。

神保家は松尾芭蕉の系譜につながる俳諧の家筋で、父の兄宗戴（むねのり）は号を梅石といい、芭門の白井鳥酔とは入魂の地方宗匠だった。地引網の盛況について、網主のもとに文人墨客が訪れ、網元が彼等の支援者となつて、俳句、和歌、絵画などを含め江戸との文化交流が盛んになつていて、神保家からは梅石のほか夜松（宗戴の子）、吟松などの宗匠が出ている。父貞恒も都船と号する俳人だった。

宗戴は、強い個性と才気を持った三治郎の将来について大いに気を遣つた。親戚である多古の平山季忠と相談して一門の平山玄徳のもとで漢学・儒学を学ばせている。

平山家は武藏平山党の一族で、一五世紀半ばに下総の中村郷に移り住み、壺岡城を居城とした。天正一八年以降、土着して郷士となつていた。平山家の当主季忠の祖父光秀には、神保宗戴の祖父宗久の次女が嫁いでおり、光秀の弟長則の娘は宗久の次男隆房の妻となつていて。そして、三治郎の姉・房が季忠の従兄弟の泰光に嫁し、神保・平山の両家は深い縁戚関係で結ばれていた。縁戚をたどつて平山家の学者から教えをうけ、今後の進路について相談するのは、まったく自然の流れであつた。忙しいときには名主役を勤めていた当主季忠の代理で、

土木工事の指図を任せられたとしても、何の不思議もない。

季忠は若いとき江戸に遊学したことがあり、林大学頭（鳳谷）の門人になっていた。学芸に長じていたというから、宗戴が甥の三治郎の教育を依頼するのはごく自然である。三治郎には繼ぐべき家はないのだから、何らかの身を立てる手段が必要であった。

家に居ずらいから親戚故旧の間を流浪したなどとはどんでもない。幾重にも張り巡らされた土地の有力者のネットワークのなかで、今後の進路に役立つ経験を深めていたのである。

第五次測量に副隊長格でしたが、渋川景佑が書いた『伊能翁行状記』（保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』に収載）のなかに、忠敬からの伝聞として「土浦の医師・某につきて経伝および医書を受く」という言葉が出てくる。多古藩には三代続いた平山姓の藩医がいたし、平山家の縁戚の鏑木村平山家は土浦に店を持つていた。これらの縁者の世話による勉学をかねた住み込みだったろう。

経伝とは四書五經でどうじの教養書なので当然である。医を学んだということについて、保柳睦美が忠敬出府以前の医術の藏書目録を、漢方の専門家に委嘱して調べてもらつたところ余技程度のものであつたという。土浦への寄遇はそう長い期間ではなかつた。

小堤時代についていえることはこのくらいであるが、横芝町小堤から坂田城祉の一帯は、忠敬が神保三治郎として青春をすごした土地である。いまでも広い農地が展開しているが、田地は當時すばらしい上等田で、近隣の中台村、屋形村と較べると反あたり収量は三倍もあつた。畑、山林もあつて、海からもそう遠くはない。暮らしやすい土地だつたのではないか。神保本家（神保利右衛門家）および父の家（神

保理左衛門家）は、いまも小堤で続いており、本家では戦国時代の文書（写本）などを所蔵している。

一〇歳から婿入りの一七歳までといえば、人生においてもつとも大切な時期である。このとき、上総から下総にかけての小関、神保、平山など富裕農民層のネットワークに支えられて才能が磨かれたのは三治郎の幸運だつた。

繼ぐべき家がない者にとつて立身の手段は、僧侶、医者、学者にならしか道がなかつた時代である。三治郎はそれらに果敢に挑戦していなかつたのではないか。父や本家・縁戚の世話で真剣に生きる道を探していなかつたのである。流浪していく、伊能家主人として必要な教養が身につけられたなどとは考えられない。

伊能三郎右衛門家に入つてから活躍を見れば、本家の宗戴および隠居の後に寺子屋を開いたという父の指導により、身につけるべきものはしつかり学んでいたということになる。父は教育に理解があつた。寺子屋の教材用に自作したという野紙が現存している。

佐原の酒造家・伊能三郎右衛門家の婿に

このとき佐原の酒造家・伊能三郎右衛門家では当主が亡くなつていて、子持ちの未亡人といつても二一才のミチが婿を求めていた。当主がなくなつていて、家運も隆盛というわけではなかつたから、家柄とか毛並みではなく才能のある婿を求めていた。

ミチの祖父で、隠居後佐原村の古記録を集め、過去百五十年間の史料を収集し『部冊帳』に編纂した伊能景利は、四五歳で隠居して家督を嫡子の昌雄に譲つた。



佐原市の観福寺にある伊能三郎右衛門家墓所。突き当たりに忠敬夫妻の墓がある。

二十二歳で家督を相続した昌雄は一六年間名主を勤めたのち、嫡男の病没とともに引退して江戸に移り住んだ。家督は弟の長由に譲られた

が、長由の妻は平山季忠の妹・民であった。長由と民の間には後に三治郎と結婚するミチが生まれた。ところが長由は一七四二年(寛保二)、三七歳の若さで病死したため、一九歳で未亡人となつた民は、娘のミチとともに実家の平山家に預けられ、伊能家の経営は親戚に任せられた。おいうちをかけるように、翌年には先代の昌雄も病没する。忠敬出生の二年前のことだつた。

ミチが一四歳となつた一七五五年(宝曆五)、伊能家の親族会議では、ミチを跡取りに定め、親戚の伊能清茂の子景茂を婿に迎えた。二人の間に忠孝という子ができるが、二年後、景茂は子供の出生を見ずに二〇歳で病死する。伊能家にとつては重ね重ねの不幸であった。

親類協議のうえ、ミチに婿を迎えて伊能家を継がせることになり、伯父にあたる平山季忠にも婿探しに依頼された。

一〇数年間、当主が不在で、不幸が続いては、いかなる名家でもたいへんである。伊能家がこのとき停滞していたのは確かであろう。しかしながら、偉人伝説のいうごとく、倒産しそうになつていたというのは当たらない。忠敬入夫二年前の酒造店卸し帳が残つていて、どうじでも一二〇〇石の酒造家で、貸し倒れを除却して、なおかつかなりの黒字を計上している。健全経営であった。

また、分家・伊能豊秋の日記によると、宝曆七年八月利根川下流が大洪水で凶作となつたとき、主のいない伊能家が本宿組の水呑百姓に一軒あたり米一斗づつ五八俵を施している。五八俵はたいした量ではないが、前年に当主が亡くなつていてもかかわらず、名家としての役割を果たしていた。(小島一仁氏)没落していいたというのは当たらぬ。

豊秋は伊能家の面倒を見る傍ら、ミチの婿探しに努力した。民やミ

子のたよりになるよう平山家周辺から候補を探して、改宗が必要だ
は熱心な日蓮宗信者で、真言宗の伊能家に入るためには改宗が必要だ
ったから、なかなかまとまらず、五年もの歳月を費やしていた。

一七六二年（宝暦一一）になつて土浦で学んでいた三治郎に白羽の矢が立つて使いが走る。家に戻つて、父とともに多古の平山家に出向くと、世話になつてゐる季忠から、佐原の酒造家・伊能三郎右衛門家に婿にゆけといわれる。三治郎一六歳、相手のミチは二〇歳の子持ち、いまの若者なら難しいかも知れないが、やつと分家したばかりの父の次男である三治郎にとつては悪い話ではなかつた。

継ぐべき家のない男にとって、身を立てるには養子という道もあつた。季忠の「お前を見こんでの話しだ」との意見に反論の余地はなか

父の実家・神保家は名門だが、分家の次男ではと、伊能家との釣り合いを考え、平山季忠の養子として送り出してくれるという。また、季忠に伴われて江戸に上った際に謁したことがある林大学頭の門人にして貰い、名前も戴くとのことだった。

数々の配慮に三治郎は平伏してお願ひした。林家から忠敬と名乗を
もらつて平山忠敬として伊能三郎右衛門家に入婿する。このときの名
乗書は、佐原の伊能忠敬記念館と世田谷伊能家に現存する。
このくだりについても、大谷は、「流浪の一青年を伊能家の主人に迎
えるについての箇付けである」というひどい表現をする。これらは偉
人伝説を補強するための「尾ひれ」である。

佐原時代に較べて、九十九里、小堤時代の三治郎については、ほんとうにわからないことが多い。断片的事実を繋ぎ合わせて忠敬の青年時代を描き大谷説に反論してみた。

忠敬の墓碑は、東京都台東区東上野六丁目の源空寺にあるが、これは死没のとき上司だった天文方・高橋景保が、すべての費用を負担して建てられたものである。費用の明細書が世田谷伊能家に残っている。

三つの面に刻まれた碑文は江戸期末の有名な儒学者・佐藤一齋の撰文である。当時として後世に忠敬の業績を伝えるための正式な文章と考えてよいだろう。ここでも

「君、諱は忠敬、字は子斎、伊能氏、東河と号し、三郎右衛門と称し、晩には勘解由と称す。北総香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南総武射郡小堤村、神保貞恒の第三子にして、出でて伊能氏を冒せり 云々」
としない。そして最後に、孫の忠晦の依頼によつて記すとある。

〔保柳晴美〕伊能忠敬の科学的業績 古今書院 1974)

撰文といつても実際には、話を聞かなければ一斎は書けないのだから、景保や忠晦が忠敬の長女・稻(とうじ)剃髪して妙薫(めうかん)たち親戚の者と相談の上、材料を提供したと考えられる。それにしては佐原入婿以前の記述が簡単すぎるのである。婿入りの経緯を知らなかつたか、知つても書きたくないかつたかの何れかであろう。

神保氏との縁組を仲介した平山家の長男・平山郡蔵は第二次測量から第五次測量まで内弟子隊員として忠敬に従つたが、第五次測量の途中で、忠敬の病気中、隊規が乱れた際の責任をとらされ、天文方・高橋景保の指示で破門されている。筆者は、この一件以来、平山氏との関係が良くなくて、墓碑に刻するに値する婿入り以前の正確な情報が入手できなかつたのではないかとおもう。

忠敬談話室たより

○県別の会員状況

まだ会員が獲得できていない県があります。できれば各県に支部がほしいところ。三人集まつたら支部を作り、旗を立てましょ。何しろ、伊能忠敬研究会も、旗上げのメンバーは六人でした。

○会員の入会動機・自己紹介などを待ちしています。新会員の名古屋の八木さんからのお便りです。

北海道	北海道
東北	青森
山形	○名
茨城	岩
七名	手
福	一名
栃	宮
木	城
○名	一名
群馬	秋田
○名	○名

伊能忠敬については、五十歳から新しい勉強をし、一大事業を成し遂げたこと、日本全国を測量し、くまなく歩いて廻つたこと、などを承知していました。私のNTT入社動機の一つには、転勤で全国を廻れるな、という期待がありました。同社をやめた後、忠敬を調べたい気持ちから「伊能忠敬研究会」入会の機会を得て、ありがたく思っています。伊能忠敬をよく知り、研究会の例会等にも参加させて戴きますので、宜しくお願ひします。 (会員番号 256 八木 勤)

関東茨城七名板木○名群馬○名
千葉四八名(佐原二二名その他二六名)
東京六九名(都内五八名三多摩一一名)

○旧聞になりますが、伊能ウオーカ・アンケートに応えて

沖繩	九州	四國	中國	近畿	東海	北陸
沖繩	大分	福岡	德島	山口	鳥取	奈良
○名	○名	○名	○名	○名	○名	○名
宮崎	佐賀	香川	高知	島根	京都	石川
鹿兒島	長崎	愛媛	○名	○名	○名	○名
○名	○名	○名	○名	○名	○名	○名
平成二十三年四月一日	現在	熊本	○名	○名	○名	○名

がら、TVの天気予報図に隊員の現在地を重ね合わせて、届かぬ声援をした2年間でした。本部隊員唯一の外国人、韓国の金哲秀さんとは合宿でルームメイトとなり、英単語混じりの会話が、その後のお付き合いのはじまりでした。この2年間には多くの忍耐があつた筈です。それを超えた多くの勇気にはただ感動しました。多くの皆さんとの知己を大事にします。

○雑誌、書籍、放送、テレビ、新聞に、伊能忠敬が出ていないかと、いつも追いかけています。

タウン情報誌「深川」136号（2000年8月発行）掲載の臨海小学校（門前仲町）歴史紹介のなかに「通学区域には、寛政7年（1795年）に日本地図を作図した伊能忠敬が黒江町（現・門前仲町1・18）に移り住み、同十二年（1800年）閏四月、56才にして日本各地へ測量の旅に出た」とありました。この小学校は黒江町の隠宅跡と同じ門前仲町一丁目で、大通りを隔てたところです。

深川が生んだ永遠のキャラクター「のらくろ」の生みの親、故・田河水泡さんの母校でもあります。今年95周年を迎えた歴史のある小学校で、現在生徒数は男子・175名、女子176名です。

臨海小学校界隈は、江戸時代初期に開発されたところで、慶長年間に深川八郎右衛門が小名木川以北を拓き、その後、南に海辺新田が完成しました。隅田川に沿つて今の永代橋付近まで埋め立てられたのは、寛永6年（1629年）だったということです。

忠敬は行く先々の名所旧跡をこまめに書き残している。芭蕉塚などは決して逃さない。（文化九年（1812年）九月二六日の日記より）宰府道を測、……。楼門は石田治部少輔三成建立。楼門より神殿まで二十一間ばかり。楼門を入ると左右回廊、右神木飛梅、東の横脇、東法華堂、並太神宮の社あり、ばしょう塚「梅が香にのつと日の出る山路かな」……。というような調子です。

このたび伊能忠敬銅像を建立することになった東京深川の富岡八幡宮境内には末社として、松尾芭蕉翁をまつる「花本社」（はなのもとしや）がある。その由来に、

祭神 俳聖 松尾芭蕉命（別号 桃青）
例祭 十月十二日

「深川」138号（2000年12月発行）では、都営地下鉄大江戸線開通を記念して「芭蕉が生きていたら何と詠んだろう」と、忠敬の歩測練習の道沿いにある芭蕉記念館・芭蕉庵跡・芭蕉庭園について触れている。

三百十数年前の貞享三年（1686年）春の芭蕉庵にて「古池や」の句を詠んだという。元禄二年（1689年）芭蕉四六歳の三月二七日、のびのびになつていた『奥の細道』へと出立した。

『五十路やゝちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうし

ない、みのむしのみのを離れて、行衛なき風にうかれ出むとす。；；』現存する芭蕉俳文中、量質とも最高とされる「幻住庵記（げんじゅうあんのき）米沢家の書き出しの部分である。

「台命を蒙り蝦夷地に下向したる道中の記」と大上段に振りかぶつた忠敬の測量日記書き出し部分と較べてみてください。

（山本公之記）

沿革 天保十四年（一八四三年）芭蕉の百五十年忌に際して二条家から「花本大明神」（はなのもとだいみょうじん）と称号を贈られたという。別説（広文庫）によれば、花本（はなのもと）なる称号は、西行の歌「ねがはくば花の下にて春死なんそのさらぎの望月のころ」より取れるものならん、とある。

お知らせ

○伊能忠敬研究会例会案内

伊能ウオーカーが終り、静かになる筈でしたが、伊能忠敬の銅像の建立、米国大図の詳細調査となかなか騒ぎの種がつきません。しかし、研究会本来の目的である忠敬に関する調査研究も地道にやらなければならぬので、研究会例会を定期的に開きたいと考えます。

できれば年に三、四回、都合のよい方が集まつていただければと存じます。講師は原則として会員で、謝礼はなし。それそれにお得意の分野のお話をいただければと存じます。第一陣として候補に上げた方には御案内を同封しておりますので、ご検討の上でお返事をお願ひします。予定表をつくりたいと考えています。

とりあえず、二〇〇一年度第一回例会を次によつて開きます。ご出席の方は「はがき」またはFAXでお申し込みください。

日 時 八月二六日 一四時

場 所 千代田区神田錦町三の二八 学士会館 三〇一号室

研究会

一四一 一五時 米国で発見された伊能大図について

会員 鈴木 純子氏（国際地図学会常任理事、相模女子大講師）

一五一 一六時 伊能忠敬顕彰史について

会員 西川 治 氏（地理学・東大名誉教授）

二〇〇〇年度総会および懇親会

一六時一一八時半 立食パーティー

会 費 五、〇〇〇円 懇親会不参加の方は一〇〇〇円

幹 事 福田弘行、伊藤栄子、山本公之

申込期限 八月一五日

○アメリカの伊能大図二〇六枚発見が大ニュースになりました

朝日は一面トップ、毎日、産経が一面、日経は第二社会面、読売は社会面で特に大きく取り上げました。東京新聞は裏面の「東京発」でカラーで大きなスペースを割きました。共同通信が一面用ニュースとして配信しましたので、北海道新聞が一面トップ、中日も一面扱いでいた。NHKは発表当日の七月四日夜一〇時のニュース、翌朝六時のニュースで流しました。予想外の反響で伊能忠敬への関心の深さに驚いています。

「快挙である」と会員各位から多数の激励のメッセージをいただきました。河崎（金沢）、大沼（藤沢）、藤岡（鎌倉）、小林（舞鶴）、武田（小平）、白根（横須賀）、谷村（吳）、垣見（新潟）、斎藤仁（東京）、石川（福岡）、川上（水戸）、原田（神戸）、香取（佐原）、小沢（埼玉）の皆さんありがとうございました。

○七月六日、金沢の河崎さんが小松で、加賀の大聖寺藩に伝えられた沿海地図小図を発見しました。写真の判断ではなかなか丁寧な写本のようです。加賀では伊能隊は冷遇されたといいますが、支藩はしっかりと地図を入手していたなど、話題はつきないようです。

○伊能測量隊員・箱田良助の生誕地広島県神辺町に生誕碑建立

中国新聞二〇〇一年四月一〇日号に、廣島県神辺町に、箱田良助の生誕碑が立てられ、八日に除幕式がおこなわれたと報じられた。碑面は「大日本沿海輿地全図完成に尽力した箱田良助生誕之地」とされたとのことである。

除幕式には良助の子孫で会社社長榎本隆充さん（六六才）東京都新

宿区在住一も出席した。地元の会員・菅波寛さんから伊能陽子さんが連絡をうけました。

○建碑の経緯など

菅波さんは、一九八〇年ごろから箱田良助文書を解説、研究されており、さらに九八年神辺町立図書館でおこなった講演「伊能忠敬と神辺出身の内弟子・箱田良助」が反響をよび、今回の建碑となりました。忠敬を支えた方々にスポットがあたり、あらためてその存在をアピールすることは、郷土愛を育むことにもなると喜んでおります。

(伊能
陽子)

○近畿日本ツーリスト横浜が「伊能忠敬ゆかりの地」のバスツアーを計画しました。研究会のメンバーが案内役で乗ります。関心のある方はお申しびみください。ただし、横浜発です。評判がよければ東京発も検討するそうです。

第一回 江戸遊学の地 深川・浅草界隈をゆく 九、三〇〇円

九月一六日 講師 齋藤 仁さん

九月一八日 講師 渡辺 一郎さん

第二回 幼少年時代の九十九里・横芝

九、〇〇〇円

一〇月一〇日および一二日、日帰り

講師 伊藤一男さん

第三回 忠敬をはばたかせた水郷佐原、香取 九、八〇〇円

一〇月二四日、二六日

講師 佐久間 達夫さん

(お問い合わせは〇四五一四七五一一一一 近畿日本ツーリスト横浜)

コース番号 46222-080	伊能忠敬ゆかりの地を巡る 第3回忠敬をはばたかせた
横浜発	水郷佐原・香取

旅行代金(おひとり)
9,800円

食昼付
添同行

出発日

10月24・26日

現地解説者同行

日
帰
り

横浜(8:30発)=
(東関道)=佐
原公園(伊能忠敬像)…伊能忠敬
旧宅…伊能忠敬記念館…小野川
(散策)=観福寺(伊能家菩提寺・
伊能忠敬、ミチの墓)=香取神宮
=横浜(18:00予定)

※歩程約1キロ。中型バスで運行

コース番号 46221-080	伊能忠敬ゆかりの地を巡る 第2回・幼少年時代の 九十九里・横芝
横浜発	

旅行代金(おひとり)
9,000円

食弁付
添同行

出発日

10月10・12日

現地解説者同行

日
帰
り

横浜(8:30発)=九十九里・い
わし博物館…伊能忠敬記念公園
…片貝海岸=横芝・小堤(忠敬の
父の実家)=多古・平山家墓所
(忠敬・ミチ夫妻の墓)=日本寺
=横浜(18:00予定)

※歩程約1キロ。中型バスで運行

コース番号 46220-080	伊能忠敬ゆかりの地を巡る 第1回・江戸勉学の地 深川・浅草界隈をゆく
横浜発	

旅行代金(おひとり)
9,300円

食弁付
添同行

出発日

9月26・28日

現地解説者同行
見学料は含まれています

日
帰
り

横浜(8:30発)=富岡八幡宮…
深川不動尊…隠宅跡…間宮林藏
墓…深川江戸資料館…震源寺・
松平定信墓…清澄庭園…芭蕉記
念館=浅草天文台跡=源空寺…
浅草=横浜(18:00予定)

※歩程約3キロ。中型バスで運行

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上

②例会・見学会の開催

- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分

野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会

金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先
(室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。原稿の状況はお問い合わせにお答えします。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイ

トルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは二つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。URISHはつぎのとおりです。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報については、「伊能忠敬研究会資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。もちろん両者はリンクしています。

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~tsakamo>

編集後記

○前号の伊能ウオーケ特集に引き続き、福田、坂本、山本氏の強力な応援を得て、64頁建てを維持すべく努力しています。

○伊能忠敬銅像の建立資金は順調に集まっています。伊能忠敬効果に驚いています。

○アメリカの伊能大図発見の報道資料、発見された大図の一覧表を本誌に載せました。間違いなく本邦初出です。

○朝日の取材記者大野君は京大の地理専攻で、在学中から伊能大図を見ていたとのことです。(京大には土浦の内田さん旧蔵の大図が数枚あります)補充取材にやってきて、もっぱら伊能図談義でした。一面だ!一面だ!と頑張って、とうとう一面トップで逃げ切りました。産経は記者会見にきませんでしたが、共同通信の配信(一面用)に途中で気がついてバイク便で資料を入手、私に散々電話してあんなきれいな一面をつくりました。はやはりプロの仕事。(渡)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No. 26 2001



ESSEYS

Expectation for Inoh Tadataka Society	HOSHINO Yoshinao	1
---------------------------------------	------------------	---

TOPICS

SHINZAWA and 18 People were Selected to Foot Survey Master HIROYUKI Fukuda	2	
TAKEO Fujioka donate his Large scale INOH MAP to SAWARA	FUJIOKA Takeo	4
206 Leafs of Large Scale Map were Discovered by map research group at Library of Congress in USA	WATANABE Ichiro	6

MATERIALS

Reading Document in Sawara Katyo (1)	KOJIMA Kazuhito	13
Survey of INOH along the Bo-So coast (4)	WATANABE Takao	18
Tokuyama Survey and Incident of Hirayama' Hakama	ITO Eikō	26
Opening of West Half Japan Survey	ANDO Yukiko	33
FROM VISITOR' REGISTERS	INOH Yoko	24

HISTORICAL POINT OF TADATAKA (2)

YAKUSIMA monument	INOH Yoko	32
-------------------	-----------	----

REGIONAL MATERIALS

Document on INOH' TUSHIMA Land Survey (3)	IRIE Masatoshi	37
Diary of INOH in Edo (6)	SAKUMA Tatsuo	41
The Base of Osumi Peninsula Survey	SASAKI Tunahiro	48

INFORMATION FOR TADATAKA MATERIALS

NEW EDITED STORY OF INOH TADATAKA' S LIFE	WATANABE Ichiro	50
---	-----------------	----

HOME PAGE OPERATION

MEETING ROOM	OTOMO Masamiti	52
--------------	----------------	----

OTHENEWS

	YAMAMOTO Kimiyuki	39
--	-------------------	----

	61
--	----

	63
--	----

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY